
転生者は召喚術士

イエデンワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は召喚術士

【Nコード】

N7902Z

【作者名】

イエデンワ

【あらすじ】

ネギま！の世界に転生した男は、召喚術を修めて楽に金を稼ぐことを己の方針とした。ネギのいとしとして生まれた男は、はたして望み通りに生きることができるのか。

アンチはありません

1話（前書き）

毎日更新で書いていこうと思います。よろしくお願いします。

1話

働く、というのは現代社会人の義務らしい。日本では憲法に定められていたし、そもそもふつうは働かなければ生きていけない。

だが、待ってほしい。現代に入り、地球の人口は爆発的に増加している。発展途上国ではそうでもないが、先進国では職に就ける人間の数は年々減っている。つまり、余裕のある誰かが働かないことでほかの誰かを救うことができるのだとは考えられないだろうか。

そもそも、働くというのは地球環境にやさしくない。肉体労働にせよ知的労働にせよ、エネルギーを消費して二酸化炭素の排出を促進する。地球環境を守りたいのなら、労働は最小限にすべきだ。

アリアドネー大学付属魔法学校。その入学試験の会場で、問題を解き終わって暇を持て余した僕はそんなことを考えていた。

試験問題はごくごく簡単で、ほぼ満点に近い点数が取れている自信がある。実技試験も僕の実力なら楽に突破できるだろうし、最高学府の付属学校とはいえ大したことはないのかもしれない。

署名欄に「デレク・スプリングフィールド：9歳」と書かれていることを確認し、あくびをかみ殺した。

この世界に転生してから早くも9年が経つ。英雄の親戚ということからウェールズの故郷では特別扱いされてきたが、それもこの学校に入学すれば終わりだ。四六時中あったこともない叔父の話ばかりする連中とは縁が切れ、僕は自由に生きることができるのだ。

留学に当たって村の面々が出してくれた金額はアリアドネー大の卒業までの学資には少し足りないかもしれないが、それはまあ自分で稼げばいいだろう。魔法使いというのは儲かるのだ。とくに、僕のような召喚術士は適当に命令を出すだけで仕事ができるのだからちよいもものである。まさに人生イージーモードというやつだ。

そんな僕の人生設計はずばり、四十歳まで働いてあとはリタイア。がっばり稼いだお金で楽隠居。これである。魔法の研究は楽しいので、老後は魔法の開発でもしながら過ごそうかと考えている。

召喚術、という一見面倒くさそうでかつこよくない分野を専攻にしているのも、楽しんでお金を稼ぐためだ。召喚術士はどんなに距離が離れても召喚したものを使役できるし、要するに召喚したものを鉱山に送ってしまえば楽しんで金が稼げるのである。召喚術士の間ではあまり好かれていない行為だが、いまは僕の大事な収入源だ。魔法の研究というのはまじめにやればやるほどお金がかかるため、お金はいくらあっても足りることはない。

故郷では天才だなんだともてはやされた僕だが、じつはそれほど大したことはない。確かに魔力量は並の魔法使いの数倍あるし前世の知識があるゆえのズルもできるが、もともとは一般人だ。戦場で人助けなど怖くてやりたくもないし、召喚術以外の勉強はかなり適当だ。適当にやっても人並み以上にはできてしまうあたり英雄の親戚なのかもしれないが、要するにモビルスーツは強いけどパイロットは未熟な状態なのだ。

そんなことを考えていると、いつの間にか試験時間が終わったようにチャイムが鳴り響いた。試験監督が解答用紙を回収し、解散が言い渡される。

試験会場を出て、宿泊しているホテルへと向かう。合格発表は一週間後なので、それまではアリアドナーに滞在するつもりなのだ。資金には余裕があるので、せいぜい観光を楽しもうと思う。

しかし、こうして魔法世界の都市を歩いているとここがファンタジーの世界だと実感させられる。亜人のたぐいにはもう慣れたが、やはりどこか違和感を覚えるのは僕が元日本人だからだろうか。魔法使いとしては一人前程度に習熟しているが、どうにも魔法世界にはなじめない。

ホテルの自室につくと、そこには先客が待っていた。

「スプリングフィールド様。依頼の品物、確かに回収してきました」
僕の部屋の隅にちょこんと座っているのは、一週間前に僕が召喚した悪魔だ。悪魔とは言っても最下級の雑魚なので、駆け出しを卒業したばかりの僕でも自由に使役できる程度の霊格でしかない。

外見はさながら手乗り妖精のようで、悪魔らしくないといえば悪魔らしくない。だが、だからこそ安心して使役できるのだ。悪魔だと看破されることはまずないだろうから、ちよつとしたお使いや採集にはうってつけなのである。

小妖精のような外見の悪魔が差し出したそれを受け取ると、僕は上機嫌にうなずいた。

「うん、ちょうどいいサイズだ。じゃあもう用はないから、今回は戻っていいよ」

僕がそう言うと、悪魔はぺこりと一礼して魔法陣を出現させ、姿を消した。

召喚術士が使役する悪魔は、そのほとんどが術者と「契約」を済ませた悪魔だ。「契約」というのは現代社会における雇用契約とほとんど同じで、術者が宝石や貴金属、あるいは魔力などを代価に悪魔を使役するという方式だ。さきほどの悪魔には代価としていくばくかの金貨を与えているため、ここ半年にわたって友好的関係が築けている。

さて。

僕がこれから始めるのは、中級悪魔の召喚だ。あわよくば契約を済ませて中級の悪魔を使役できるようになりたい、という願望から生まれた計画で、契約が成功すれば金もうけの手段はさらに増える。いままでは下級の悪魔を鉱山に送って労働させていただけなのでそれほど金もうけの効率は良くなかったが、中級の悪魔を召喚できれば話は変わる。

なにせ、連中はそこその戦闘能力と「現世でやられても死にはしない」という性質を持っているのだ。戦場に送って傭兵として働かせればかなり儲かる。

召喚術のいいところは、使役するものが悪さをしても術士に迷惑がかからないということだ。悪魔とかわす契約の中には「なにがあっても雇い主のことを話さない」という旨の一文があるし、都合がいいことこの上ない。

この世界の魔法使いの大半は、その力を正義のために役立てるべ

きだと考えている。当然世界平和の維持も魔法使いの仕事だと考えている節があるようで、だから金で雇われて戦場で働く魔法使いは同法から厳しく排斥される。

しかし。召喚術士にとってそんなことは問題にならない。なぜなら、自分が戦場に行く必要がないのでいくら傭兵まがいのことをしようともばれるはずがないのだ。報酬の受け渡しに注意しておけばいいだけなので、ちよろいものである。

物思いにふけりながらも、故郷から持ってきた魔法のカバンを開いてレジャーシートを取り出す。このレジャーシートには召喚した悪魔を拘束するための魔法陣が描かれており、これにいくつかのルーン文字を書き足して魔力を注ぎ込めばいつでもどこでも召喚が可能になるという優れたものである。故郷にいた召喚術士がくれたものだが、もともとは叔父であるナギ・スプリングフィールドが拾ってきたものらしい。とにかく性能がいいので重宝している。

ホテルの床にレジャーシートを敷き、あらかじめ用意しておいた牛の血でルーン文字を書き足す。魔法陣とルーン文字に不備がないかどうかを三度チェックし、万全の態勢を確信した僕は琥珀のかけらを魔法陣の中央に置いた。召喚する悪魔がある程度選別するための仕掛けで、ルーン文字触媒、呪文の組み合わせによって召喚される悪魔の性質や霊格が変わってくるのだ。

今回召喚するのは、情報収集や隠密行動に適した中級悪魔だ。直接戦力になる戦闘特化型の悪魔も傭兵に向いているが、作業員向きの悪魔というのはもっとありがたがられる存在だ。絶対に口を割らない作業員など、人間には到底ありえない。死んでもリサイクルが

できるという点では、悪魔ほど工作員に向けた生き物はいないかもしれない。

時刻は正午を一時間ほど過ぎたところ。悪魔の力が最も弱まる正午からは少しだけ時間が経っているが、まあ大丈夫だろう。

始動キーを唱えるといったん口をつぐみ、それから呪文を唱え始める。

朗々と呪文を唱えていると、体から魔力が流れ出すを感じる。予想外に魔力の消費が早いことに少しだけ焦るが、これくらいなら誤差の範囲内だ。気持ちを落ち着けながら詠唱を続け、徐々に輝き始めた魔法陣をじっと見据える。

「……満たされぬもの、わが呼びかけに答えて出でよ」

呪文の最後の一説を口にすると、ひととき大きな魔力が吸い取られ——そして次の瞬間、魔法陣が強く発行して中から何者かが出現した。

「……お前か、俺を召喚したのは」

粗野な口調にむっとするが、ここで腹を立てては相手の思いつぽ。召喚された悪魔は、口先三寸で自分を拘束する魔法陣から逃れようとするものだ。言葉に耳を貸してはならない。

「契約だ」

悪魔の目を睨み付け、僕はそう言った。

召喚された悪魔は、悪魔にしては華奢な体格だった。身長は2m以上あるようだが、横幅はそれほどでもない。全身から放たれる威圧感の下級悪魔のものとは別格だが、相手は魔法陣に拘束されている。なんら恐れることはない。

「やとわれの工作員として、地球の中東あたりで変装して活動してほしい。報酬は半分ずつで、休暇は応相談だ」

僕が一気にまくしたてると、悪魔は沈黙を保ったまま考え込むそぶりを見せた。

どうも試されているようで気に入らないが、悪魔が口を開くのを待つ。どうせ、僕が根負けして条件をよくするのを待っているのだろう。その手には乗るものか。

5分ほど沈黙が続いた。

悪魔の顔を眺め続けるのも退屈なので、僕は悪魔に背を向けて召喚術の教本を取り出す。魔法陣は万全だ、悪魔が陣から出てくることはない。

魔法でお湯を沸かして紅茶を入れ、教本を開く。内容が頭に入るわけではないが、こういうポーズをとることが重要なのだ。そのうち根負けして妥協するに違いない。

一杯目の紅茶を飲み終わり、二杯目を入れようとしたその時。ようやく悪魔は口を開いた。

「いいだろう。補足はあるか？」

悪魔との契約がうまくいきそうだと感じた僕は、にやりと笑って

から答えた。

「戦場に落ちてる銃とか爆弾とか、できるだけ回収して持ってきてくれるとありがたい。修理したり改造したりして売ると金になると思うんだ」

「そのくらいなら問題はない。では、契約を」

即答した悪魔は表情を変えない。もともとそういう気質の悪魔なのか、それとも僕を動揺させるための演技か。人間味がないことこの上ないが、考えてみればこいつは悪魔だ。人間味がないのは当然だろう。

「じゃあ、これにサインを」

そういつて、僕は契約書と羽ペンを取り出した。召喚術士向けに販売されているマジックアイテムで、術者と悪魔がそれぞれサインすることで契約が結ばれるというアイテムだ。

書面に目を通した悪魔がサインをすると、契約書は発行して僕の手元に戻った。僕はそれを魔法のカバンにしまいこみ、悪魔に向き直る。

「じゃ、いまから仕事してもらっていいかな？」

「了解した、術士殿」

悪魔は見た目に反して優雅な礼をすると、忽然と目の前から消え失せた。長距離移動系の魔法を使ったのだろう。どうやら、魔法の腕は僕よりずっと上らしい。

まあ、これでますます財布も潤うし、一か月後からは楽しい学校生活の始まりだ。せいぜい授業にでも備えて勉強をしておこう。

そう考えた僕は、魔法陣や道具一式を片付けふたたび魔法の教本を開いたのだった。

2話

アリアドネー大学付属魔法学校は、入学年齢も卒業年齢も決まっていない自由な学校だ。卒業に足るだけの実力がついたと教員に認めてもらえば卒業認定証がもらえる、そんな学校なのだ。つまり、本気を出して勉強すれば常人よりはるかに早く大学に入ることできるということ。ここを卒業すれば魔法世界の最高学府と名高いアリアドネー大学に無条件で入学できるのだから、モチベーションも上がるというものである。

入学式を終え、今日は時間割を組む日だ。ここでは各自が自分の好きな学科を選択して履修するという方式のため、時間割は自由に組んでいいことになっている。

僕が修めたいのは召喚術全般にマジックアイテムの作成、それから補助系の魔法だ。必修の授業というものは存在しないため、本当に学びたいものだけを学ぶことができる。何とも素晴らしいと思う。

召喚術というのはいくつかある魔法の体系の中でもとくに魔力量に依存するところが大きい。なにせ、使役するものを現世にとどめるのには結構な量の魔力を消費するのだ。そのため、魔力量の多い僕は召喚術士への適性があるといえる。

いまのぼくの魔力量だと、中級の悪魔をもう一匹召喚すれば魔力は限界だろう。実生活で魔法を使うことを考えると、中級一匹と下級六匹という現状に満足するしかないようだ。もっとも、召喚時に使用する魔法陣やルーン文字の質を高めることで悪魔をとどめるのに必要な魔力は随分と減るといふ話だ。学校ではそうした技術を中心

に勉強を進めようお考えている。

とりあえずは、魔法陣作成とルーン文字実習、マジックアイテム作成と補助系魔法。そのあたりの授業をとれば問題はないだろう。

さらさらとペンを動かし、時間割を作る。いくつか興味深い授業もあったが、僕は老後のために資金を蓄えなければいけないのだ。余計な授業料を納める気にはならないし、未練を感じながらも必要最低限の授業だけをとることにした。

が、必要最低限の授業だけをとったつもりでも、結局は平均より多めの科目を受講することになったようだ。月曜日から土曜日まではほとんど隙間なく埋まってしまった。

理由は簡単だ。悪魔を使役するなら、悪魔の生態や社会について教える授業も取らなくてはならないのだ。それらの講座も取ることにしてしまった。

これでは、とてもではないが悪魔たちをフルに働かせていられる余裕はないだろう。下級悪魔たちについてははやいところ鉱山から引き揚げさせようと決心し、完成した時間割を受け付けに提出した僕はそのまま下校した。授業はあさってからなので、明日一日は余裕がある。さて、何をするべきか。

明日の予定を考えながら歩いていると、すぐにホテルについてしまった。僕は学生寮に入るためにここのホテルからはそろそろ引き上げなければいけない。

自室の扉を開けると、そこには先日召喚した中級悪魔がいた。

「やあ、調子はどうだい」

声をかけると、彼はこちらに札束を投げてよこした。百ドル札の札束。数えてみると、

30 あった。つまり、3000ドルの収入ということか。

「今回は運が良かったが、次からはこうもうまくいかないとのことだ。銃器類はここに置いていく」

どうやら彼は報告のためだけに帰ってきたようで、それだけ言うと転移の魔法で消え失せてしまった。

彼が消えた後には、数丁の拳銃とでかいライフル、マシンガンらしきものが残っていた。どれもこれも薄汚れているが、少なくとも大きな破損はない。

アリアドネーにも銃器を扱う店はあったはずだし、ルーン文字で銃を加工するのも面白いだろう。さいわい、この街に到着した際に下級悪魔を使ってそういう店の場所は調べてある。僕は通販で買った年齢詐称薬を取出し、一錠だけ口に放り込むと出かける準備を始めた。

僕の持っている魔法のカバンには、質量を無視して好きなだけ荷物をしまうことができる。これもまた亡き叔父の遺産だそうで、彼

の息子があまりにも幼すぎるという理由で僕に送られた。僕が物干しそうな顔をしていたのも原因ではあったろうが、それにしてもあの村の住人は英雄の関係者に対して気前が良すぎる。

現在、あの村にいる英雄の関係者はネカネさんとネギだけだ。さぞかしちやほやされていることだろうが、あいにくとこれっぽっちもうらやましくはない。英雄という言葉にあこがれないわけではないが、戦場で体を張って人助けなど僕には到底無理な話なのだ。後方支援くらいなら考えないでもないが。

そんなことを考えながらホテルを出て、表通りにある魔法用具店に向かう。魔法世界の主な都市のほとんどに出店してる大手チェーンで、僕が必要とするものもきつと手に入るだろう。魔法用具店に行ったら後は裏通りの銃器の店に行き、カタログをもらってくるつもりだ。

平日の昼間だからか、人通りは少ない。休日にもなればラッシュ時の東京駅並みに混雑する場所だが、どうやら今日は苦しい思いをせずにすみそうだ。

魔法用具店に入ると、まずはその品ぞろえの多さにびっくりした。この店は5階建てだが、なんとそのすべてが魔法用具の売り場なのだ。日本の平均的なホームセンターの3倍ほどはありそうだ、と内心ため息をつく。

エレベーター近くの売り場案内を見てほしいものがどこにあるかを探す。今日買う予定の品は、金属に文字を掘り込むための道具と魔力のこもった特殊なインク、それと杖自作のハンドブックだ。いま使っている発動媒体は指輪型の品で、このタイプの発動媒体は本来魔法剣士が扱うものだ。僕は接近戦など絶対にごめんだし、杖タ

イプの発動媒体の方が性能が高いことが多いのだ。それに自作した杖は市販のものよりも自分にフィットするので、魔力の消費を抑えられるとか。マジックアイテム作成の授業も（金になりそうなので）取るし、そこで培う技術を生かさない手はない。

エレベーターで四階まで上がり、品物を探す。僕のほしいものはすべてこの階にあるようなので、いちいち移動する手間が省けた。

インクは目立つところに置いてあったので、とりあえず二番目に安い無難そうなものを選んだ。僕はルーン文字に関しては駆け出しもいいところだし、あまり高価な素材を使って失敗するのはよくないだろう。高価な素材を扱うのは高い技術が身についてからでいい。

自作杖のハンドブックも見つけたが、しかし肝心の文字を掘り込む道具が見つからない。ネットで調べてくれれば良かったかと思いつつ売り場をうろろしていると、店員さんが声をかけてきた。

「お客様。何をお探しでしょうか」

「ああ、金属にルーン文字を掘り込む道具がほしいんですが……」

眼鏡をかけた誠実そうな顔の男だった。

「それでしたら、ご案内します」

どうぞこちらへ、と男は僕を先導する。

ついた先には「鉄筆コーナー」という標識がぶら下がっており、僕の中に築かれていた鉄筆のイメージがガラガラと崩れ落ちていった。鉄筆ってそういうもんじゃないだろ。

「ありがとうございます、助かりました」

店員に礼を言い、品物を物色する。

インクと違って消耗品ではないので、最初から高価なものを買っても問題はないだろう。

売り場の中で一番高価なものを選び、かごに入れる。少々高すぎるかとも思ったが、中級悪魔が持ってきた報酬がある。このくらいの買ひ物は余裕だろう。

レジに並んで会計を済ませ、購入した品物を魔法のカバンに入れて店を出た。財布はだいぶ軽くなったが、それに見合うだけの買ひ物ができたと思っている。

悪魔というのは傭兵として扱いのもいいが、武器商人としても優秀だ。戦場で拾った銃を回収して修理・加工して売れば結構なお金になるだろう。元手がほとんどかからないマジックアイテム作成の練習にもなるので、我ながら素晴らしい案だと思う。

表通りから路地裏へ抜け、地図を片手に銃器を取り扱う店を目指す。アリアドネーは比較的治安が良かったため路地裏に不良がたむろしているようなこともなく、僕のようなチキンハートでも安心して通行できる。人目があるところを歩くに越したことはないが、僕は魔法使いであることを示すローブを着ている。わざわざ魔法使いにちよっかいを出す不良もいないだろう。

実をいうと、僕自身の戦闘能力はそこら辺の魔法使いに毛が生えた程度でしかない。悪魔をこの世界にとどめるために魔力を消費しているから、戦闘に費やせる魔力の量が情人とほとんど変わらないのだ。攻撃呪文もそれほど熱心に覚えたわけじゃないし、魔法の矢といくつかの捕縛術が使える程度だ。まあ、いざとなったら下級悪

魔を数匹呼んで使えばいいのだ。何度も言うが、召喚術士というのは単独で戦ったら負け。他力本願の物量作戦が召喚術士の本懐なのだ。

契約した悪魔が回収してきた銃器類はほとんど損傷がなかったよ
うで、店では弾薬とカタログ、手入れの道具だけを購入した。自身の
護身用にも拳銃が欲しいから、手入れのやり方についてのパンフ
レットも分けてもらった。

ホテルに帰着し、魔法のカバンを開けて中身を取り出す。鉄筆、
インク、ルーン文字の解説書、拳銃、工具。これだけあれば銃の改
良には事足りる。

拳銃の取扱説明書をめくりながら慎重に解体し、油をしみこませ
た布でよく手入れする。何とも言えない匂いが部屋に広がるが、こ
んなものは後で魔法でどうにかすればいい。

一通りの手入れを終えると、今度も説明書を見ながら慎重に組み
立てた。銃というのは繊細だから注意して扱うように、と銃器店の
オヤジが言っていたことを思い出す。魔法障壁があればただの銃が
暴発した程度では大した怪我は負わないが、それでもこれは売り物
なのだ。購入者から苦情が来ては困る。

組み立てが終わると、今度はルーン文字の解説書を開いてインク瓶のふたを開け、鉄筆の先端をインクに浸した。

今回刻むルーンは、銃本体の保存状態をよくするルーンだ。錆や細かい砂から内部の機構を守り、手入れの手間を省くためのルーンである。

銃器店のオヤジ曰く、銃の威力に係るような改造は銃の構造をよく理解できるようになってからにしろとのこと。素人が内部構造の改造に手を出すとロクなことにならない、と言われた。専門家の言うことなら間違いはないだろうから、習熟するまではその言い分けを守ろうと思う。

インクに浸していた鉄筆を握り、拳銃を作業台の上に乗せる。刻むルーンは暗記してあるので、教本を見なくても問題はない。

鉄筆は値段相応によく働く。何かの魔法がかかっているのか、グリップを切り裂き金属に溝を刻みこんでいる。事前に練習として紙にルーンを書きつけたりしていたが、ひよつとすれば紙に書くのと同じくらいの労力で金属にルーンが刻めてしまう。いい買い物をしたな、と悦に入りつつルーンを施し、ティッシュでこぼれたインクをふき取って作業は終了した。

この銃は安物でそれほど良くないものらしいから、適当に売りさばいてしまおう。自分で使うものには万全の加工を施したいし、アリアドネーにいたる間は戦闘に参加することはまずないだろう。どこに就職するかということはまだ考えていないが、就職は当分先だろう。とりあえず、いまは加工技術に磨きをかけなければいけない。

部屋の片づけが終わり、年齢詐称薬の効果も切れた。ぶかぶかに

なつた服を着替えながら、僕はこれからの人生設計について考えを巡らしていたのだつた。

3話

学校が始まって3カ月がたった。僕ことデレク・スプリングフィールドはいま、とても仰天していた。つい先週の試験でほとんどの科目で一位をとって浮かれていたところにとんでもないニュースが飛び込んできたからだ。

非常に驚くべきことに、故郷であるウェールズの村が悪魔の大群に襲われ、村人のほとんどが石像にされてしまったというのだ。

村人の大半はいつも叔父の話ばかりしていたとはいえ、僕もかなりお世話になっている。身寄りがなかった僕を育ててくれたスタンさんをはじめ、数人の村人とは親しくしていたのだ。それが石像にされてしまったというのだから、取り乱すのも当然と言える。

「校長。ちょうど冬休みも近いですし、いったん帰ってもいいでしょうか」

知らせを受け取った僕はとりあえず校長のところへ行き、直談判を始めた。この学校には担任という制度がないため、こうした相談ごとについては校長に持つていくのが習わしなのだ。

「うむ、故郷の一大事とくれば帰らねばならぬな。すぐに手続きをしておこう」

「ありがとうございます」

安堵のため息をつき、校長に礼を言って校長室を辞する。

すでにホテルは引き払って寮にうつっていたので、僕は学生寮の自室へと向かった。

中東に派遣した中級悪魔もそこその働きを見せており、下級悪魔は魔界へ戻したもののかなりの額の収入を得ることに成功した。加工した武器に関してはアリアドネーの裏通りの武器商人と話をつけ、それなりの値段で売ること成功している。魔法の触媒やマジックアイテムの素材には惜しむことなく金をつぎ込んでいるが、それでも先月の出納帳を確かめたら大幅な黒字だった。

メルディアナ魔法学校の校長から来た手紙によれば、明日にはこちらに迎えの人間がくるという。僕はそれに備えて、出かける準備をしていた。

契約した悪魔が返ってきたときのために置手紙を置き、勝手に部屋にはいられないように3重の力ガをかけ、散らかった衣類類をトランクにまとめ、そして賞味期限の近い食べ物を胃の中にしまいこむ。どれくらい部屋を空けるかはわからないから、定期購読している新聞も止めたほうがいいかもしれない。ガスの元栓もきつくしめ、冷蔵庫の裏のゴキブリホイホイを新しいものに取り換えると幾分かは落ち着いた。

ずいぶんと部屋が汚くなっていたことを実感しつつ、新聞社に電話をかけて配達を止めてもらい、ベッドの下に散らばった魔道書の類を棚に戻す。悪魔の真名や特徴が書かれている本で、こういうものを有効に使うと悪魔との契約を有利に進められる。

この学校の授業は日本の中学や高校とはまったく違い、どちらかといえば大学のゼミに近いものがある。講座をとった十名前後のメンバーと講師が積極的に話し合って理解を深めていく授業は、僕に

はとても新鮮だった。もともと魔法に対する好奇心はあったが、あいう授業スタイルは好奇心を強く燃え上がらせる。それに、講師たちがみな自分の専門に誇りを持ちながらも生徒にそれをわかりやすく教えようとする姿勢は非常に好感が持てるものだ。

部屋の片づけと旅の支度を終え、ティータイムにするかとやかんを火にかけようとしたその時。部屋に敷いた魔法陣が発行し、中東に派遣していた悪魔が帰ってきた。

この悪魔、名前をレミーというのだが、どうやら彼は当たりだったようだ。情報収集の技にたけるほか、戦闘能力も中級悪魔の中ではかなりあるほうらしい。本人は謙遜していたが、ほかの中級悪魔を召喚して一緒に仕事をさせたときにそんな事を聞いた。

そんなレミーからは現在、透明化の魔法を教えてもらっている最中だ。魔法障壁と違って攻撃魔法を行使すると効果が消えてしまうのがネックだがなかなか便利な魔法である。魔法の教本は高いので教えてもらえることは彼に聞くのがベストなのだ。学校では教えてもらえないような実践的な呪文もいくつか教えてもらったし、習熟度こそお粗末なものだが鍛錬を積みば戦場でも通用するだろう。もっとも、僕は可能な限り戦場に立ちたくはないのだけだ。まあ、力をつけておくのは悪いことではないと思う。

「おや、どこかへでかけるのですか？」

いつものように報酬を山分けしたあと、レミーは僕に尋ねた。

「ああ、少し用事が出来て故郷に帰らなきゃいけなくなっただ。ちようどいいや、護衛をお願いできる？」

「いいですとも。透明化して後ろから付いていきましょう」

そう答えると、レミーはぶつぶつと呪文を唱えて透明化してしまった。

「あ、いまは魔界に戻ってていいよ。明日迎えの人が来たから呼ぶから、それまで待っていてくれれば」

「了解しました」

なにもない空間から声が響いたかと思うと、そこにあった悪魔の気配は消えうせた。

ちなみに、自らの魔力や気を隠すための魔法というのも存在するらしい。難しい術式なのでまだ手を出していないが、こちらもなかなか使えそうだ。やはり攻撃魔法を使うと効果が消えるようだが、透明化と合わせれば素晴らしい効果を発揮するだろう。

さて。

時計を見れば、もう十時を回っている。風呂に入った後に知らせを受け取ったのもうこんな時間だ。

目覚まし時計をセットすると、僕はベッドに入って眠りについた。

翌朝。

朝食を済ませた僕は荷物の入ったトランクを持ち、学校の校門にたたずんでいた。時刻は午前6時。レミーは僕の背後で透明化して控えている。

レミーは人間の姿に変身することもできるのだが、今は控えさせている。服が足りないのだ。僕は年齢詐称薬と一緒にいくつか服も買ったが、レミーの人間形態は細身の老紳士。イギリス人のティーンエイジャー向けの服が似合うはずもなく、そのうち趣味のいいスーツなんかを買うまでは人間に変身させるのは控えさせるつもりだ。

しばらく経つと、向こうから人がやってくるのが見えた。くたびれたコートを着た、無精ひげが似合う男性だ。見た感じ30歳前後だろうか。

男は僕に気付くと陽気に手を振り、啜っていた煙草を消した。

「やあ、僕は高畑・T・タカミチ。君を迎えに来たよ、デレク君」

レミーを護衛につけた意味ないやんけ。僕を迎えに来た人物はなんと、世界委規模で有名なお方だった。

「あ、デレク・スプリングフィールドです。後ろに控えてるのはレミーといって、契約してる悪魔です。今日はよろしくお願いします」

誰が来ても驚かないつもりだったが、有名人が迎えに来てびっくりしたので少し緊張してしまう。

「ははは、そんなに改まらなくてもいいよ。君の叔父さんにはよくお世話になったし、僕はただの英語教師だから」

嘘をつけ。

心の中で突っ込みを入れる。それにしても、悪魔云々については突っ込まないのか。

「じゃあ、行きましようか。ゲートを使うんですか？」

「ああ、アリアドネーのゲートからロンドンに出て、そこで転移符を使うことになってる。さ、行こうか」

ジャケットの内ポケットから転移符を取り出して僕に見せ、高畑氏はそう言った。

歩き出した高畑氏の横に並び、アリアドネーの郊外にあるゲートを目指す。

「ところで、ネカネさんは無事なんですか？ 手紙で姉さんのことだけは触れられていなかったの……」

そう、メルディアナの校長から来た手紙には、スタンさんをはじめとする僕が親しくしていた面々の容態については書かれていたが、ネカネさんについては何も触れられていなかった。死者は一命も出なかったと手紙にはあったから大丈夫だとは思っただが……。

「ああ、ネカネ君なら大丈夫だよ。ネギ君の話によれば、君の叔父さんが来て助けてくれたんだそうだ」

「えっ、サウザンドマスターは死んだんじゃ？」

「僕もそう思ってたんだけどね。どうやら、そうでもないらしいんだ」

「そうですか……」

正直、複雑な気分だ。

確かに、伝え聞いているサウザンドマスターの功績は素晴らしいものだと思う。彼を殺戮者だと非難する声もあるが、彼の活躍がなければ戦況は膠着しもっと多くの死者が出ていただろう、と大多数の識者は述べている。僕もそう考えているし、だから英雄が生きているとなれば喜ぶべきなのだろうが、しかし。

「ネギがかわいそうですね……」

育児放棄というのはあまり感心できない。アーニヤのお母さんやネカネさんが母親代わりを務めているとはいえ、それもあくまで「代わり」でしかないし。多感な時期の子供にとって、親がいないというのはつらいだろう。

僕は全盛の記憶や精神があるから一人でも大丈夫だったが、ネギは正真正銘の子供だ。サウザンドマスターに対するあこがれもいささか行き過ぎていきらいがあったし、心配だ。

「そうだね。できれば僕がそばにいてあげたいんだけど、僕もなかなか忙しくてね……」

高畑氏はそう言って顔をしかめた。恩人の息子の役に立てない自

分を責めているのだろうか。

「高畑さんは日本のマホラというところに勤めていると聞いています。そちらのほうでだれか親代わりを探してみるというのはどうなんでしょう」

学生寮のロビーには様々な雑誌があるが、高畑氏の経歴については以前何かの雑誌で読んだ記憶があった。日本に勤めていると聞いて、ひそかに会ってみたいと思っていたのは内緒だ。

「その案も検討してみたけど、いろいろと事情があつて、ネギ君を日本に連れてくることはできないみたいなんだ」

高畑氏は言葉を濁した。おそらく、僕に言うのははばかりるような政治的事情があるのだろう。高畑氏の横顔はどこか悔しそうに見えた。

「そういえば、高畑さんは日本で教員をやりながら悠久の風にも入ってるんだよね？ 大変じゃないですか、それって？」

アリアドネーの教師たちを見ててわかったことだが、教員というのは決して楽な仕事ではない。それに加えて悠久の風で活動しているというのだから、モーレッツ社員もびっくりなハードでタイトなスケジュールなのだろう。

「最近はどうでもないけど、一昔前は一週間寝ないで働いてたこともあったね。一年前によく戦争の後始末が終わったから、最近是比较的のんびりできてるよ」

「い、一週間……」

陽気に笑っているが、やはり高畑氏は只者ではなかった。

4話

午前十時ちょうどに、僕たちは転移符を使ってネギたちが入院しているという病院まで転移してきた。護衛のレミーには病院の外で待機してもらっている。高畑氏と僕は病院に入り、ネギとネカネさんがいる病室の前に立っていた。

高畑氏が病室のドアを開けると、こちらに気づいた二人が声をかけてきた。

「こんにちは、高畑さん、デレク君」

「こんにちは、デレク、タカミチ！」

高畑さんと僕はネギたちに挨拶を返し、見舞い客用の椅子に腰掛けた。

ネカネさんのほうはまだ気だるそうだが、ネギはすっかり元気なようだ。

ふと見ると、ネギのベッドに大きな木の杖が立てかけられていた。なかなか使い込まれており、細かい傷がところどころについている。けっこうな魔力を感じるが、いったいどうしたのだろうか。ネギはこんな杖を持っていなかったはずだ。

僕がいぶかしげに杖を見ていると、それに気づいたネギがうれしそうな顔で言った。

「これ、父さんに助けてもらったときに父さんがくれた杖なんだ！父さんが助けてくれた話、聞きたい？」

なるほど、高畑氏が「サウザンドマスターは生きている」といったのはこういうことか。しかしまあ、何で今になって村に現れたりしたんだろうか。

「ああ、聞かせてくれたらうれしいな」

「あのね、僕が湖で遊んでるときに村のほうで火があがってるのが見えたんだけど……」

僕が答えると、ネギは話し始めた。高畑氏もネギからは聞いていなかったのか、興味深げな顔をして聞き入っている。

村の人々が石にされているのを見たくだりについては流石に悲しそうな顔をしたが、サウザンドマスターが助けに来てくれたくだりにさしかかるととてもうれしそうな顔をして離し始めた。ところどころネカさんが補足をし、熱くなりがちなネギを抑えている。

「……というわけで、父さんはこの杖を僕にくれて、それから空の向こうに飛んでいったんだ」

話し終わると、ネギは少し疲れた様子だったがとても満足げな顔をしていた。どうやら、誰かに聞かせたくてうずうずしていたらしい。

「なるほど、それじゃあいつかまたナギさんに会えるかもしれないね」

「うん、僕もマギステル・マギになってお父さんに会いに行くんだ」

高畑氏の言葉に大きくうなづき、ネギは瞳を輝かせて将来の夢を語った。

「マギステル・マギといえはネギ君、そろそろ魔法学校に入学してもいいころなんじゃないかな？ ほら、メルディアナには寮もあるし……あそこの校長先生も歓迎してくれるって言ってたから、ちょっと考えてみてくれないかな？」

メルディアナ魔法学校、か。僕も今の学校に行く前には在籍していたし、あそこの先生方はみな気立てのいい立派な人たちだ。この年から寮に入るというのもつらいものがあるかもしれないが、下手なところに送られるよりはよほどましだろう。

「メルディアナ、かあ……姉さんはどう思う？」

「私はいいことだと思うわ。あそこの先生方はとても暖かい人たちだし、ネギならがんばれると思う」

少しだけ悩むそぶりを見せてからネカネさんは答えた。たしか、彼女もあそこの卒業生だったはずだ。

ネカネ姉さんの言葉を聞き、ネギは入学を決心したようだった。

「それじゃあ、そこに入学することにするよ。えっと、いろんな手続きとかは……」

「ああ、それは僕が済ませておくよ。あとでメルディアナの校長を呼ぶから、説明を受けるといい」

高畑氏が言った。

「何から何まで、ありがとうございます。ここの入院費についてはあとでお返ししますので……」

ネカネさんが高畑氏に深々と頭を下げ、感謝の言葉を述べる。

「いいんだよ、お金は有り余ってるから。それより、今日の朝ロンドンでケーキを買ってきたんだ。みんなで食べようじゃないか」

高畑氏は手を振ってネカネさんの言葉をさえぎり、スーツのポケットから高級そうなケーキの箱を取り出した。どうやら、僕のかばんと同じように内部の空間が拡張されているポケットらしい。なかなか便利そうだ。

「僕チヨコケーキがいい！」

少しうとうとし始めたネギだったが、高畑氏がケーキを取り出すと目を見開いて背筋を伸ばした。ネカネさんと高畑氏、僕は思わず苦笑する。

病室の隅においてあったテーブル運び、4人でテーブルを囲む。各々が好きなケーキを取ると、僕たちは他愛もない雑談に花を咲かせ始めた。

時計の針がまもなく正午を知らせるころ、僕と高畑さんはそろそろ病室を出ることにした。椅子やテーブルを片付け、花の水をとりかえてから外へ出る準備をする。高畑さんは古びた白いトレンチコートを、僕は防寒の魔法がかかった黒いマントを羽織った。

「じゃあ、今日はこれで失礼させてもらうよ。二人とも、お大事にね」

「ゆっくり休んでね、二人とも」

ベッドに横になった二人と挨拶を交わし、僕と高畑氏は病室を出た。

「思ったより元気そうでしたね、ネカネさんたち」

病院の廊下を歩きながら僕がさういって、高畑氏は答えた。

「この病院の魔法医は優秀だし、高価な魔法役も使ったからね。あと5日もすれば、二人とも退院できるそうだ」

大方、この人のポケットマネーで買い求めた薬だろう。お金には余裕があるといっていたらしいし、うらやましいことだ。悠久の風は有給ではないそうだから、マホラの教員というのはよほど給料がいいのだろう。少し、惹かれる。

「ところで、スタンさんたちはどうなんでしょう。治療薬は見つかりそうなんですか？」

「いや、爵位級の悪魔が施した石化術らしくてね、人間界には治療薬が見つからないそうだ。いま、治療形のアーティファクトを持ったミニステル・マギに片っ端からあたつてるところだね」

爵位級。悪魔の中でもきわめて強力な連中で、これと契約できる術士はごくごくわずかだ。先の戦争で召喚術士はだいぶ数を減らしたらしく、いまはほとんどいないとか。軍事的には召喚術士というのはきわめて厄介な性質を持つので、両軍は目の色を変えて敵方の召喚術士を狩りまくつたらしい。契約はできなくても使役はできる、というレベルの術者が今の魔法界では最高位の召喚術士だ。

契約によらない使役の場合、通常の数十倍の報酬を用意する必要がある。爵位級悪魔との交渉では通常の契約による報酬もかなりの額になるというから、契約によらない使役をできるのはごくごくわずかな金持ちか権力者だけだろう。

自分の才能がどこまであるかはわからないが、しかし。

あるいは僕ならば、爵位級の悪魔との契約ができるだけの力を身につけられるのではないだろうか。

爵位級の悪魔による石化を解除できるほどのアーティファクトなど、存在するかどうかもわからない。戦前にはあったかもしれないが、戦争を通じて多くの強力な魔法使いや従者が死んでしまった。いまこの世界にそういうアーティファクトがあるかどうかと問われれば、大方の人間はないと答えるだろう。僕もそう思う。

「……そうですか。見つかるといいですね」

僕の心中を見透かしたかのように、高畑氏は優しい目をして言った。

「君はまだまだ子供だ。石にされた人たちのことは大人が何とかするから、君が責任を感じる必要はないんだよ」

責任、そんなものは感じていない。お世話になった村の人たちを助けたいというのは、いうならば人情とか義とか、そういったものだろう。

「僕もできるかぎりのことはしたいと思ってるんです。それに、魔法の勉強は楽しいですし」

「勉強が楽しい、か。まったく、僕の生徒たちに聞かせてやりたいね」

ははは、と二人で笑う。どうやら、いつの時代も教育者というものは生徒のやる気を引き出すのに苦労するらしい。

「じゃあ、僕はこの後メルディアナの校長と話すんだけど……デレク君はどうする？」

「僕もあそこの校長先生にはお世話になりましたから、できれば少しお話をしたいと思います。大丈夫ですか？」

「うん、今回は聞かれて困る話じゃないからね」

聞かれると困る話をしたことがあるのか。

「いやまあ冗談だけど。お、うわさをすれば」

高畑氏がそういった次の瞬間、廊下の角からメルディアナの校長が現れた。

「お久しぶりです、校長先生」

高畑氏が先に話しているよとばかりに目配せをしたので、僕は前に進み出てメルディアナの校長。に挨拶した。

「おお、デレク君か。元気にやっとなるかね」

「おかげさまで元気に過ごしております。その節は本当にお世話になりました」

メルディアナの校長は高位の召喚術士で、僕は散々お世話になった。授業のレベルを逸脱した質問にも快く答えてくれるいい先生なので、どの生徒からも慕われている。

「私があげた本は役に立ってるか？ 少し古い本だったが……」

「ええ、あの本にはすごくお世話になってます。わかりやすいですし、いい本だと思いますよ」

卒業祝いにもらった召喚術の本は、下級から中級悪魔の召喚に対応した解説書だ。実践的な内容で図も結構ついているので、何度か読み返している。

「それはよかった。これから精進したまえ、デレクよ」

「はい、先生」

校長先生は満足げにうなづき、高畑氏に眼を向けた。

「おお、高畑さん。わざわざ来ていただき、感謝いたしますぞ」

「頭を上げてください、僕も好きでやってることですから。ところで、ネギの入学についてなんですが……」

二人が話し始めると、僕はどうにも手持ち無沙汰になったので窓の外に目を向けてみた。

今日はこの後ロンドンで一泊して、明日の朝に学校に変える予定だそうだ。高畑氏にはロンドンの観光でもしてきたらどうだと言われたものの、魔法の勉強がしなくなってきたので一刻も早く学校に帰りたいかったりする。

魔法の勉強は本当に楽しい。いまやってるラテン語は英語と似ているところがあるので学習は楽だし、古代ギリシャ語は先生が愉快な人なので勉強に力が入る。マジックアイテムの作成は半ば趣味のようなものだし、魔方陣もジグゾーパズルみたいなものだと思えばそこそこ楽しめる。それに、なんといつても上達が実感できるところがいい。召喚術への適正は結構なものらしく、この前のテストでは召喚術履修者のなかでもトップの成績をとった。日本人だったときにも経験したことだが、勉強というのは自分がいい成績をとれている間は楽しいものだ。ほかの人間は知らないが、少なくとも僕に関しては成績上位者でいる間は勉強のモチベーションはうなぎのぼりだ。

そんなことを考えていると、高畑氏と校長の話は終わったようだ

つ
た。

5話

ロンドンに宿泊した次の日、僕は寮の自室へと帰ってきた。

時刻は正午、昼食はゲート近くの売店でサンドイッチを食べた。魔法世界の食べ物はどうも舌に合わないが、ゲート近くの店ではこちらの食品もたくさん売っているので助かった。

トランクをあけ、荷物を整理する。

今は冬期休暇中だから授業はないが、もちろん課題は出ているし例え課題がなくとも魔法の勉強は欠かしたくない。高畑氏はほどほどにしるといっていたが、僕自身はもっと勉強に打ち込みたいと考えている。

悪魔を召喚する際に用いる魔方陣は、通常ラテン語で描かれることが多い。だが、上位の術者は古典ギリシャ語とルーン文字を組み合わせた魔方陣を用いるし、上級あるいは爵位級の悪魔との契約にはそちらを用いるのが普通だ。悪魔をこちらの世界にとどめるのに必要な魔力も少なくてすむし、なにより悪魔に対する拘束力が違う。より高度な知識と魔力制御を必要とするが、爵位級悪魔との契約を目指す僕にとっては避けて通れない道だ。

魔方陣に書かれた言葉や紋章の細かい働きを理解しなければ魔法人の力を最大限に引き出すことはできないし、それに魔方陣というのは自分の属性や魔力量、呼び出す相手の性質や真名などによって細かい修正をしなければならない。たとえ模様を丸暗記したところで使いものにはならないのだ。

属性といえば。

僕の属性は水属性である。直接的な攻撃力には欠けるが、絡め手や支援に力を発揮する魔法が多い。

魔法障壁というものがあるが、これには大きく分けて二つある。ひとつは魔力を何らかの物理的な作用として発現させて相手の攻撃を防ぐものと、魔力によって魔方阵を描き、その働きによって攻撃を防ぐものだ。

水属性は、考えればわかると思うが前者のタイプの障壁を構成するのは苦手だ。しかし空気中の水を操って魔方阵を描くのは得意だし、多くの魔法使いはそうした防御術を使っているという。

僕がいま研究しているのは、魔力を流し込んだ水銀を操る魔法だ。この魔法の使い手は大戦でほとんど死亡しており、いまや教本に載っているのみなのだが、興味深い魔法だと思う。液体を操る魔法であるために水属性の僕とは相性がよく、攻撃・防御ともに優れた魔法でもあるため何かと役に立つだろう。

問題は、いちいち手動で操作しなければならない点だ。

大戦でこの魔法を活用した魔法使いたちは降霊術によって水銀に靈魂を宿らせ、自動で攻撃や防御を発動するようにしていたらしいが、僕は降霊術に関しては門外漢もいいところなのだ。

まあ、手動で動かしても十分に強い魔法だ。自動で動かす術は今後も継続して探そうとは思っているが、そこまで優先順位の高い研究ではない。

基本的に戦闘は行いたくもないが、しかし魔法使いとして生きる以上戦いは避けて通れない道、らしい。戦争が起これば駆り出されるだろうし、魔法使いというものに対して恨みを持った集団もいる。

また、僕は遠縁とはいえサウザンドマスターの血族だ。叔父に恨みを持った連中に襲撃される可能性も捨てきれない。

いくら優秀な悪魔と契約しているとはいえ、やはり自衛のための魔法も覚えておきたい。攻撃魔法は決して必要ではないが、障壁や索敵の魔法はあったほうがいいだろう。そういう意味で、水銀の魔法は僕にとってちょうどいいのだ。

高畑氏が少しだけ言っていたが、魔法世界にはまだまだ紛争の種がごろがっており、ちよつとしたきっかけでいつ戦争が起こるかわからないのだとか。アリアドネーで研究員をやるのはよさそうだと考えていたが、戦争が起これば徴兵されることは目に見えている。できれば、卒業後はあちらの世界で就職したほうがいいだろう。おっぴらに魔法を使えないのは不便かもしれないが、その分あちらの世界には科学文明がある。生活水準はそう変わらないだろう。

だが、あちらの世界で魔法の技術を生かして仕事をするとなると働き口は早々見つからない。要人警護の仕事は実入りがいいと聞いたが、僕には向いていないように思う。やはり、戦争の危険は承知でアリアドネーで研究員をやるのが一番なのだろうか。将来についての悩み事は尽きない。

優先順位の高い研究といえば、古典ギリシャ語とルーン文字の学習こそがいま最も優先順位の高い研究だ。

銃器の加工やマジックアイテムの製作を通じて金をもうけ、そこから生活費を差し引いて残った金は魔法の研究に注ぎ込まれることになる。魔法の研究というのはお金がかかるし、マジックアイテムの材料費も馬鹿にならない。

宝石や貴金属をマジックアイテムの原料として使用すればそれだけ効果の高いものが出来上がるし、魔方陣を描くにしてもただのインクとドラゴンの血液ではわけが違ふ。杖も性能の高いものを自作するなら樹齢2000年の霊樹の枝を使用したり強力な魔力を持つ

宝玉を埋め込んだりしなくてはならないし、お金はいくらあっても足りないのだ。まあ、マジックアイテムというのは総じて長持ちする。必要なものをそろえてしまえば、その後はお金もたまりやすくなるかもしれない。

そんなことを考えながら本棚に手を伸ばした僕は、古典ギリシャ語の入門書を開いて勉強を始めた。

夜の八時になり、ようやく一日の勉強ノルマが終わった。語学というのはやればやっただけ成長が実感できるので、数学や歴史などといった学問に比べてモチベーションが上がりやすいのだ。大きくあくびをしたあと、僕は外に夕食を食べに行くことにした。

アリアドネーでは比較的外食産業が発展しており、向こうの世界の料理を出す店も多い。僕がいま向かっている店も、通には有名なラーメン屋だ。ラテン語の先生が教えてくれた店で、あっさりした味付けが食べやすいと評判を呼んでいるらしい。先生はしょうゆラーメンを勧めていたが、僕は塩ラーメンのほうが好きだ。

二ヶ月前から週に五度の頻度で通いつめており、座高の問題で力

ウンターに座れない僕のために特別性のクッションが置いてある。空いている店内に入って店主からクッションを受け取ってカウンターに座り、お冷に口をつけてからコップをカウンターに置いた。カウンターの中では中年の店長が麺を茹でている。名前はまだ聞いていないが、顔立ちは東洋人のそれだ。

ごとり、と塩ラーメンがカウンターに置かれる。僕ではなく、隣の客に出されたものだ。右隣に座っている初老の魔法使いは割り箸を割って、ラーメンを食べ始めた。

ほどなくして僕にも塩ラーメンが出され、僕もまた割り箸を割ってラーメンをすすりだした。相変わらず塩加減が絶妙で、あっさりとしているためにスープも飲みやすい。麺は平均的な太さで柔らかさもちょうどよく、僕は夢中になってラーメンをすすった。

魔法の研究というのはけっこうエネルギーを消耗するので、必然的に腹が減る。ここのラーメンはそこそこの量があるほうだが、僕と隣の魔法使いはスープを完飲し、同時にお冷の入ったコップを手にとった。

「ごちそうさまでした」

店主にそう言って、カウンターを拭いてから店を出る。

「さて、帰ったら勉強するか寝るか、どうしようかな……」

少し疲れた。帰ったら真つ先に寮の共同風呂に入って寝てしまうのもいいかもしれない、などと思っていると後ろから声をかけられた。

「まだ日付も変わってないじゃないか、この時間に寝るなどなんともったいない時間の使い方だ。勉強したまえ、若者よ」

振り返ると、ラーメン屋で隣に座っていた初老の魔法使いだった。

「年をとった今だからこわかるがな、十代までが一番無理が利く年頃なのだ。多少体を壊してでも、やりたい研究に打ち込んでおいたほうがいい」

「あの、あなたは……？」

初老の魔法使いは名前も名乗らずに何事かを言い始めた。僕が名前を聞くと、驚いたかのように立ち止まって答える。

「私を知らんのか？ アリアドネー大学副総長のレイモンド・ランカスターだ」

「これは失礼しました。なにぶんこちらへ来てまだ日が浅いもので申し遅れましたが、僕はデレク・スプリングフィールドです」

只者ではなさそうな雰囲気の人だった、まさかそんなお偉いさんだったとは。そういわれれば確かに、偉大な魔法使いっぽい雰囲気があるような気がする。

「君にはわからないかもしれないが、若いうちに学んだことは一生忘れないものなのだ。この街には優秀な学者もすばらしい資料もある、留学生なら寝る間を惜しんで勉強に励みなさい」

言われてみればそうかもしれない。記憶力は年をとるとともに衰えていくというし、僕が留学できたのはスタンさんをはじめとする

村の面々が資金援助をしてくれたからだ。それに、向こうの世界にはアリアドネーほど優秀な人材がそろっている場所はほとんどないだろう。無為に時間を過ごすのはもったいないかもしれない。

「なるほど、確かにそうですね。では、今日は早く帰って勉強することになります」

「うむ、励めよ若者。いまが最も伸びる時期だ」

「ご教授ありがとうございます。では」

よし、これからはもっと勉強に打ち込もう——基本的にはそう簡単に人を信用しない僕だが、ランカスター氏の説教は僕にそう思わせるだけの強い何かがあった。

ランカスター氏に頭を下げ、僕は寮へと急いだのだった。

6話

アリアドネーに入学してから六年後、僕はアリアドネー大学の最終学年になっていた。

六年をこの街で過ごして、僕はこの街でも最高クラスの召喚術士になっていた。召喚術の技量もかなり成長したが、魔力量に限ればこの街の召喚術士の中でもトップだろう。古典ギリシャ語とラテン語も読み書きは完璧だし、マジックアイテム作成の技術もだいぶ上がった。

再来月に提出する卒業論文のテーマは「爵位級悪魔の召喚と契約について」。すでに理論と専用の術式・魔方阵は出来上がっており、あとは召喚と契約を済ませれば卒業資格を手に行ける。召喚する悪魔についてもすでに文献を読み漁って決めた。話によると故郷を襲った悪魔は伯爵級が最上位だったとのことなので、念には念を入れて侯爵級の悪魔を召喚するつもりだ。アリアドネーではここ数年行われていなかったような大魔術になるだろう。

爵位級悪魔の召喚というだけならそこその力を持った術士ならできないことはないが、しかし爵位級悪魔との契約ともなれば戦争が終結して以来、成し遂げたものはいない。

自作の杖を持ち、魔法がかかったかばんに武器類を詰めて、僕は住んでいるアパートから出た。向かう先は魔法世界でも辺境のほうに位置する渓谷で、ブラックドラゴンの目撃情報が入っている場所だ。

ドラゴンというのは財宝を貯めこむ性質がある。爵位級悪魔の召喚を控えた僕は、ドラゴンの持つ宝石類や貴金属、貴重なマジック

アイテムを奪って召喚術に使用するつもりなのだ。すでに件のブラックドラゴンには懸賞金がかけており、心おきなく狩ることができる。

ドラゴンが出る場所の近辺に転移できる転移符を懐から取り出し、魔力を流し込んで使用する。転移符を自作できる程度の技術力はないが、ここ数年で貯金はそれなりにたまった。早期リタイアして穏やかな老後生活を送るにはまだまだ足りない額だが、転移符くらいならなんとかなる。

件のドラゴンにはこれまでさまざまな魔法使いやトレジャーハンターが挑んだらしいが、それらはほぼ全滅。生き残った魔法使いの証言によると、ドラゴンの中でも強大な方だという。

まあ、心配は要らないだろう。ルーンによる加工を施した重火器やマジック・アイテムに、10体の上級悪魔と悪魔を組み込んだ水銀。これらの兵装を駆使して戦えば十分に勝ち目はあるはずだ。銃の弾丸にはひとつ残らず魔法的な加工を施してあるし、今回の討伐に投入する兵装は武器商人に売れば1億円近くにもなるくらいだ。ここまで拔かりなく準備をして負けようものなら、僕はとんだ愚か者だ。

とはいえ。

やはり初めての实战ともなれば緊張するもので、精神が高揚するクスリを少量摂取しているとはいえないやな汗が出てしまう。

契約した10体の上級悪魔は現地で召喚する予定だ。腕時計を見て時刻を確認した僕は、深呼吸をしてから転移符を発動させた。

現地に着いた僕は、契約した悪魔たちを現界させるべく呪文を唱えはじめた。

独特の抑揚に気をつけながら呪文を唱えつつ、コートの内ポケットから試験管を取り出し、魔法で拡張された空間から水銀を取り出す。約30リットルもの水銀が試験管から出てくると、僕は水銀に魔力を通して悪魔を現界させるための魔方陣を描いた。

水ではなく水銀を用いることの利点の一つとして、いつでもどこでも強力で精密な魔方陣を準備できるということが挙げられる。いま使っている水銀には洗脳して意思を奪った下級悪魔を溶かして混ぜ込んでおり、暗示や催眠を用いることによって自動防御の機能を植えた。当初は動きも悪く反応も遅かったために失敗したかと恐れたのだが、半年ほどがたつと非常に優秀な兵装として進化してくれた。溶かし込んだ悪魔は魔界でも罪を重ねて扱いに困っていたという曲者だったので、倫理的にも問題はない。

ただ、防御に特化させた代償として攻撃性能は犠牲になった。せいぜい、人の腕くらいの太さの水銀の鞭を振り回すくらいだ。水銀は重いため当たればそこそこ効くかもしれないが、攻撃動作が遅すぎてまず当てることは無理だろう。まあ、自動防御の兵装としては十分に優秀なのだから不満を言っても仕方ないが。

魔力を流し込むと半径5mほどの魔方陣が赤く発光し、次の瞬間

には10体の上級悪魔が出現した。

「じゃあ、これからブラックドラゴンの討伐を始めよう。前回の打ち合わせどおりに振舞ってくれ」

「了解した」

10体のリーダーを務めるがっしりとした体格の悪魔がそう言うってお辞儀をすると、他のものも僕に対して恭しくお辞儀をした。僕はかばんからいくつかの重火器を取り出し、悪魔たちに手渡す。

「使い切ったら捨ててくれてかまわない。使い方はわかるな？」

悪魔たちに手渡したのは、紛争地帯でテロ組織から奪取させたRPG-7だ。ドラゴンの障壁を抜くために強力なルーンによって加工を施してあり、一発でドラゴンの鱗を貫けるはずだ。今回の作戦の要であり、非常に金がかかっているので当ててもらわなければ困る。

RPG-7を担いだ悪魔たちは空に飛び立ち、ブラックドラゴンを探すために散開した。発見し次第念話でその旨を伝えるように言うてあるので、僕はここで待機する手はずだ。

悪魔たちが散開して10分ほどが経ったころ、一体の悪魔から念話が届いた。

『こちらナンバーエイト、東南東の溪谷にてドラゴンを確認。どうやら寝ているようです』

念話は全員に届いたらしく、悪魔たちが詳しく問い詰めはじめた。集中を乱されるのはいやなので、念話を切って向こうへ向かう準備をする。

水銀を再び試験管に戻し、右手の杖を掲げて 水の転移門 の魔法を行使する。召喚した悪魔の場所はわかるので、転移によって移動するのが最も手早いのだ。

足元に水たまりが現れた次の瞬間、僕はドラゴンを発見した悪魔の近くに転移した。ほかの悪魔たちは僕が転移したことを感じ取ったようで、僕に続いて転移してきた。

「うわ、これはまたなんというか……」

ドラゴンは自分の財宝の山の上で寝ているようだった。金銀財宝を積み上げ、その上に自らの巨体を乗せている。非常に悪趣味で、しかしどこか荘厳な光景だった。

「じゃあ、手はずどおりに打ち込んでくれ」

すでに僕たちの魔力を感じ取ったのか、ドラゴンは身じろぎして低くうなった。少しの焦りを感じた僕は、臨戦態勢の悪魔たちに命令した。

10体の上級悪魔が翼を広げて飛び立ち、RPG-7を構えて慎重にドラゴンへと近づいていく。

僕もかばんから改造済みの対物ライフルを取り出し、ドラゴンに照準を合わせた。一発限りの銃だが、威力はすさまじい。

悪魔たちが慎重に降下し、そろそろ発射するかと思われたその時——ブラックドラゴンは飛び起きて咆哮した。500mは離れていないはずなのに、衝撃が体を襲う。衝撃は障壁で止めたものの、これで奇襲によるメリットはなくなってしまった。

悪魔たちがRPG-7を発射し、対戦車榴弾が四方八方からドラゴンに襲い掛かる。

ドラゴンの天然の障壁を破り、対戦車榴弾が鱗を食い破って炸裂する。ドラゴンが苦悶の叫びを上げるが、悪魔たちはそれぞれ自らの得意とする魔法を唱え始めた。

のた打ち回るドラゴンに照準を合わせると、僕はライフルの引き金を引いた。大口径の弾丸が空を切ってドラゴンに命中し、右目を傷つける。全身から血を流すドラゴンはしかし、翼をうって空へと飛び立った。

かぎ爪と尻尾が不運な悪魔に襲い掛かる。その悪魔がかぎ爪にとられた瞬間、ほかの悪魔たちの魔法がドラゴンに炸裂した。不運な悪魔は巻き添えを喰らい、現界を保てずに魔界へと送還された。

残りの悪魔は9体、ドラゴンは相当な手傷を負っているものの戦意は旺盛なようだ。

対物ライフルを投げ捨て、試験管から水銀を出して接近戦に備える。悪魔たちは善戦しているようだが、やはり上級悪魔ではドラゴンに及ばないようだ。僕が召喚する予定の侯爵級ならばドラゴンなどひねり潰せるだろうが、ないものねだりをしては仕方がない。

水銀を展開し、急襲に備えながら悪魔たちの戦いぶりを観察する。

悪魔たちはどうやら戦いを長引かせ、手傷を負ったドラゴンをじわじわと追い詰める先方を探っているようだ。悪魔らしいといえば悪魔らしいやり方である。上下左右を囲み、時間差で魔法を放つことによって知能の低いブラックドラゴンを翻弄している。ドラゴンの鱗は魔法に対してかなりの防御力を持つために魔法は致命傷とはなりえないが、しかし着実にダメージを与えているようだ。

いまでもまた悪魔の放った 雷の暴風 がドラゴンを襲い、無防備な腹に直撃する。鱗が焼け焦げて剥がれ落ちたのを見て、僕は思わずガッツポーズをした。これでようやくともに攻撃が通るようになる。

悪魔たちも鱗が取れたことに気づいたようで、ここぞとばかりに集中砲火を浴びせにかかった。雷撃が炸裂し、炎が襲い掛かり、鋭い氷剣が飛来してドラゴンの腹に突き刺される。

ドラゴンはなす術もなくやられ、今度は力を振り絞って逃げようとした。

『逃がしますか？』

『いや、追え』

リーダー格の悪魔からの念話に答え、僕はドラゴンのコレクションの元へと走りよる。逃げるドラゴンは悪魔たちが追っているのにじきに始末するだろう。どうやら、今回の戦いは首尾よく行ったようだ。

僕はほくそ笑むと、竜の財宝へと手を伸ばした。

ドラゴンの財宝と懸賞金は、合計金額を日本円に換算するとおよそ200億円ほどにもなるくらいだった。が、そのほとんどは侯爵級悪魔の召喚のために費やされてしまい、手元に残った金額は日本円に換算しておよそ10億円ほどだった。

いま僕は大学の広間を借り、侯爵級の悪魔を召喚するための巨大な魔方阵を設置しているところだ。魔方阵を描くのに使用するのは竜の血と溶かした金を混ぜた液体で、魔方阵の各所には魔力のこもった宝石が置かれている。これらは契約が終われば碎けて魔力を失ってしまうため、実質的には宝石を使い捨てにしているに等しい。

広間の中に人はいないが、窓の外から魔法世界のマスコミがカメラを向けている。戦後初めての爵位級悪魔との契約ということで、僕が英雄の親戚だということもあって取材の人間が押しかけてきているのだ。ずうずうしくも広間の中に押し入ろうとする連中の相手

をするのは思いのほか疲れたが、泣き言を言っている場合ではない。

アリアドネーに着てから六年。すでに十六歳になったが、これではようやくスタンさんたちを助けることができる。

輝かしい展望を胸に、僕は召喚の詠唱を始めたのだった。

6 話（後書き）

あと3話ほどで原作開始です。いましばらくお待ちください。

7 話（前書き）

皆様からの簡素・メッセージなど、大変励みになっております。これからもよろしく願いします。

7話

「地這う暗黒の者、静寂の闇に声を響かす者。我は其を従えるもの。古の法に従いて、今ひとたび漆黒の世界に通じる門を開かん……」

古典ギリシャ語で呪文を詠み上げ、魔方陣に魔力を流す。ルーン文字が魔力に反応して赤く輝き始め、置かれた宝石から古代の魔力が流れ出す。

「其は高貴なる者、気高く誇りを抱きし者。暗黒の底で眠る者に告ぐ、我の声を聞くべし」

魔界の奥深くに眠るといふ侯爵級悪魔、ベルンハルト「エーデルシュタイン」侯。侯爵級悪魔の中でも強大な力を持つ悪魔であり、剣術と魔法に長けるといふ悪魔だ。記録によれば、最後に現世に召喚されたのはおよそ1500年前。悪魔にしては珍しく争いを好まない性質のため、持っている力の割に魔界での知名度はそれほど高くないのだという。

「いざ扉を開きて、漆黒の暗渠より悪鬼を招かん……我との契約を望むならば出でよ、ベルンハルト」エーデルシュタイン！」

最後の一節を唱えると、莫大な量の魔力が体から流れ出すのを感じた。同時に魔方陣が直視できないほどに輝き始め、置かれた宝石

の輝きもいつそう強まる。光が目を焼くが、じっと耐えながら魔方陣の中央を凝視していると、やがて魔方陣の上の空間がゆがみ始めた。

ゆがんだ空間に魔方陣の放つ光が吸い込まれていく。輝いていた宝石は徐々に曇っていき、いくつかのものにはひびが入り始めた。

魔法陣の光が収まった瞬間、魔方陣の中央に突如として背の高い男が出現した。

身長はおよそ180cmほどで、上等そうな黒いマントを羽織っている。服もまた一目見て高級品だとわかるつくりで、そして腰には一振りのレイピアを下げていた。

羽のついた気障な帽子をかぶっているが、滑稽さはない。むしろ男の気品をいつそう高めているようだ。

顔立ちは整っており、見た目は20代後半といったところか。

「ベルンハルト」エーデルシュタイン侯爵か？」

召喚されたばかりの悪魔に対して、僕はそう問いかけた。

僕と対峙する悪魔はすさまじいまでのプレッシャーを放っている。わざとそうしているのか素でこうなのかはわからないが、先日のブラクドラゴンより数段は格上だろう。

怜悯な視線がこちらを向き、目が合った瞬間背筋に悪寒が走る。魔方陣は万全なはずだが、この悪魔が本気を出せば破れてしまいそうな予感がした。

「汝が私を召喚せし者か。汝は我に何を望む？」

低い声で悪魔は僕に問いかけた。詰問するわけでもなくただ質問されただけなのに、僕は土下座して謝りたい衝動に駆られた。が、意志の力でそれを抑え込み何とか答える。

「僕はデレク・スプリングフィールド。君を召喚したのは恩人を助けるためと、僕の護衛だ」

「弱き者よ、汝に私を従える器量があると思っっているのか？」

平坦な口調で悪魔は問いかけてくる。

「器量は知らないが、實力はある。契約に応じよ、侯爵」

悪魔の目をしっかりと見据え、命令する。召喚に応じた以上は魔方阵に拘束されるのだから、恐れることは何もないと己に言い聞かせながら。

沈黙が場を支配する。悪魔はなにやら考え込んでいる様子を見せたかと思うと、次の瞬間には言い放った。

「よかるう。汝をわが主人と認め、契約を交わそう」

悪魔は虚空に指を這わせたかと思うと一枚の古びた羊皮紙を取り出し、僕に差し出した。

侯爵が素直に応じたことにうれしく思い、魔法陣の中に手を伸ばして契約書を受け取る。ざっと目を通した僕はあらかじめ準備しておいたナイフで親指を切り、羽ペンに血をつけて契約書に署名をした。

署名した契約書は赤く発光し、次の瞬間には消えうせた。契約がなされたことによって僕の中からさらに魔力が流れ出し、ベルンハルトを現世にとどめるために消費される。

「ではこれからよろしく頼む、ベルンハルト」

「了解した、小さき者よ。汝の身は私が守ろう」

うなづきあった僕と悪魔は、お互いにながちりと握手を交わした。その瞬間にカメラのフラッシュがいつせいに焚かれ、大魔術の成功に興奮した学長や教授、マスコミが広間に押し入ってきた。

「本当におめでとう、スプリングフィールド君。君はわが大学の誇りだよ、明日の一面記事は間違いなく君の事で埋め尽くされるだろう」

「ありがとうございます、学長。広間を貸してくれたこと、感謝します」

「なに、優秀な学生には惜しみなく援助するのが教育者というものだ」

マスコミのインタビュー攻勢をしのいだ後、僕はアリアドネー大学の学長室で学長と対面していた。

「しかし、これからはどうするのかね？ できれば卒業後は本学で教鞭をとってもらいたいと思っているのだが……」

「まずは故郷の村の人たちの治療が先決ですね。先ほど尋ねたところ、ベルンハルトは解呪もできるとのことでしたから。明日一番でイギリスに飛ぼうと思います」

「だが、卒業後はどうするのだ？ 君ほどの術士であれば世界中のさまざまな組織からオファーが来ると思うが、進路はどうなんだね」

正直、研究が面白すぎて進路について具体的なことは何も考えていない。が、やりたいことは見えてはいる。

「そうですね、教職に興味があるのですが……なにぶん教育に関しては何も勉強していないもので」

高畑さんや副学長、学長といった立派な教育者に接することが多かったせいか、いつのころからか教職というものに憧れを持つようになった。幸い人前で話すのは得意なほうだし、まだ学資に余裕はあるから教員免許をとるだけの期間大学に在籍することは不可能ではないだろう。

「なるほど、教師か。それなら、わが大学の教育学部に編入するといい。授業料は全面的に免除しよう」

「いいのですか？」

「なに、次世代に対する投資だと思えば安いものだ。それに、今回の件ですます本学の評判は上がるだろう。君の成してくれたことに比べれば、授業料の免除などではむしろ足りないくらいだ」

「ありがとうございます」

上機嫌に話す学長に感謝する。

「君の勤勉さがあれば免許の取得は一年もあれば済むだろう、期待してるぞ後輩よ」

愉快そうに微笑む学長に重ねて礼を言い、学長室を辞去する。

転移魔法を使ってアパートに戻ると、部屋ではベルンハルトが待機していた。

「調子はどうだ、こっちは久しぶりなんだろう？」

「私が隠棲している間に随分と人間の世は変わったのだな、朋輩から話には聞いていたがやはり驚きは大きい」

隠棲。なんと素敵な響きだろうか。きつとこの悪魔とは気が合うだろう、そんな予感がする。

「ここなんかまだまだローテクさ、あちらの世界の日本という国なんかもつとすごいぞ」

「それは見てみたいものだな。ところで、明日は何時に発つのだ？」

「朝の六時に出発だ。本当に治せるんだよな」

「もちろん、ただか伯爵級程度の魔法が解けぬほど私は落ちぶれてない」

「そうか、なら安心だな」

「ああ、貴君は座って眺めてるだけでいいさ」

ほとんどの悪魔は召喚した術者に対して敬語を使うものだが、ベルンハルトに限っては敬語を使うことをしなかった。まあ、それこそ本気を出せば対戦の英雄と同等の力を持つといわれる悪魔なのだ。召喚術式で現世にとどめている以上本来のスペックを十分に発揮することはできないのが悪魔というものだが、それでもベルンハルトは規格外の強さを誇るのだろう。争いごとは好むところではないと言っていたが、むしろ護衛としては望ましい気質だ。

それにしても、僕もそろそろ将来のことを考えなければいけない時期か。

飛び級を何度か繰り返して16歳で大学の最終学年にまではなったものの、研究一筋だったせいにか世の中のことには疎い。大学の研究員として生きていくならばいいのだろうが、しかしこのままアリアドネーで一生を過ごすのも何か物足りない気がする。

同期の連中はほとんどが内定を取っており、内定を取っていない連中は全員大学院に行くのだという。アリアドネー大学は日本で言う東大みたいなものだから、卒業生は皆優秀だ。

日本といえば。

僕もそろそろ日本が恋しくなってきた。先日、大学の近所にうまいてんぷら屋が出来たのをきっかけに日本の生活が懐かしくなってきたのだ。アリアドネーでの生活に不満があるわけではないが、やはりどこか物足りないものはある。

まあ、すでに出来上がってる卒業論文を提出しさえすれば卒業できるのだ。新学期の開始は二ヵ月後だから、スタンさんたちの解呪を済ませた後は日本に観光に行くのもいいかもしれない。

「そういえば、霊体化なるものができるって文献にはあったけど、それ本当？」

旅支度を終えて荷物をトランクに詰め込んだ僕は、ふと気になってベルンハルトにたずねた。

「ああ、霊体化か。できるが、それがどうしたのか？」

真顔で聞き返してきた悪魔に、僕は答えた。

「いや、いままで会ってきた悪魔にはできるのがいなかったからね。少し気になったんだ」

「まあ、今は失われた技術だからな。昔ならば爵位級の悪魔はみなできたものだが、最近の爵位級には霊体化できない者もいると聞く」

霊体化とは、平たく言えば幽霊状態になるということだ。物理的な干渉を一切無効化して透明になる変わりに、現世のものへの干渉もできなくなる。常に術者のそばに待機できる上に魔力の消費も抑えられるので、何かと重宝する技術だ。

「じゃあ、明日は目的地に着くまでは霊体化してついてきてくれ。」

マスコミに見つかる困るから、少し変装していくつもりなんだ」

「了解した」

時刻はすでに深夜。明日に備えて、そろそろ眠りにつくべきだろう。

「僕は寝ることにするよ。おやすみ」

「いい夢を」

そのまま僕は寝室のベッドに横になり、すぐに意識を手放したのだった。

8 話

故郷の村人たちの石像は、メルディアナ魔法学校の地下室に安置されている。メルディアナの校長はこのあたりの魔法使いの指導的な立場にあるので、行き場のない石像たちを自分の学校の地下へと置いたのだ。

ベルンハルトを従えてメルディアナ魔法学校を訪れると、校門から校長が出てきて地下室まで案内してくれた。もう夏休みに入っただけ、校内に学生の姿はない。

「そういえば、今日の朝刊の記事は見たか？ 一面を丸々使って君のインタビューが載っていたぞ」

地下室までの道を歩いていると、校長がそんなことを言った。

「朝刊はまだ読んでませんが、どうにも気恥ずかしいですね。僕としてはスタンさんたちの治療が終わるまでは気が抜けないので」

「謙虚でよろしい。しかし、数年前の教え子がいまや世界トップクラスの召喚術士とは、なんとも誇らしいものだ。明日はうちにもインタビューが来るといっし、私も鼻が高い」

「やめてくださいよ先生、いまはあれですけど戦前の術士たちに比べればまだまだなんですから」

僕が困ったように言うと、校長は愉快そうに笑った。

地下室に着き、校長に扉の鍵を渡された。

「本当なら私も付き添いたいのだが、あいにくと来客があつてな……
がんばってくれ、頼むぞ」

「全力を尽くします」

実際に解呪するのはベルンハルトですけどね、と心の中で付け加える。

一階へ戻っていく校長に背を向けて地下室の扉を開け、ベルンハルトを伴って中に入る。

「うっ、これはひどい……」

村人たちの石像は想像を絶するほどにおぞましいものだった。

ただの石像とはわけが違ふ。なにせ、生きた人間がそのまま石像にされたのだ。恐ろしいほどにリアルだし、なによりどの村人の表情も恐怖や苦痛を感じさせるものなのだ。まさに悪魔の所業である。

「どう、解けそうか？」

僕から見れば未知の術式でちんぷんかんぷんなのだが、ベルンハルトならば術式を理解できるのだろう。手近な石像に手を触れてから、しばらくして彼は口を開いた。

「術式の構成が未熟だな。百人前後の人間を石化させなければいけなかったとはいえ、粗雑に過ぎる。これならば解呪は楽だろう」

ベルンハルトのコメントを聞いて、僕は安堵した。万が一彼が解呪できなかったらどうしようか、という不安もあったのだ。

「全員の解呪にはどれくらいかかるんだ？」

「大規模解呪術を使えば30分で何とかできる。始めていいか？」

「ああ、頼む」

僕がうなづくと、ベルンハルトは朗々と呪文を唱え始めた。

空気中の魔力が変質していくのが手に取るようにわかる。魔法陣やルーンを通じて解呪を行っているのではなく、複雑で緻密な構成を変質した魔力によって描くことで解呪術を行使しているのだ。

独特の抑揚で古典ギリシャ語の呪文が詠み上げられ、変質した魔力が渦を巻き始める。ベルンハルトの全身から魔力が流れ出し、空気中の変質した魔力と結合してなんともいえない異質な魔力が形成され始めた。

どれほどの時間、そうしていただろうか。

20分ほど詠唱が続くと、地下室の空気は気分が悪くなるくらいに濃くなっていた。濃度が上がりすぎた魔力が可視化され、赤い靄が地下室を満たし始める。靄は部屋の中を複雑な軌道で流れており、よく観察してみるとその軌道はひとつのルーン文字を形成している。可視化するほどの変質した魔力によってルーンを描くことで、この世の物質で形作られたルーンよりはるかに強力なルーンを形成しているのだ。すでに失われた技術とされていたが、まさかこの目で目撃することになるうとは。

詠唱は続き、さらに魔力の密度は上がっていく。いまや部屋の中を漂う魔力ははっきりと目に見えるようになっており、赤い帯が巨大なルーン文字を描いていた。

普通の魔法使いが目撃すれば卒倒しかねないような大魔法を行使しているというのに、ベルンハルトは涼しい顔だ。かれこれ30分も呪文を唱え続けているというのに、いまだに疲れた様子を見せない。

詠唱が最終段階に入ったようで、僕の目にもはっきりとそれがわかった。抑揚が変化し、それとともに部屋中が赤い光に満たされ始める。

村人たちの石像が、まるで可視化した魔力に共鳴するかのように赤く輝きだした。それとともに石化の術式の構成がほつれ始め、少しずつ元の人間の姿へと戻っていく。

やがて、ルーン文字を形成していた魔力が突然結合を解き、石像たちの中へと流れ込んだ。

「ルーン文字の性質を魔力に付与したのか……」

魔力でルーン文字を描くことによって、魔力そのものに描いたルーン文字の性質を与える。非常に高度な技法だ。

解呪の性質を付与された魔力が石像に流れ込んだことで、石化の術式はいっぺんに霧散した。部屋中が白い光に満たされたかと思うと、次の瞬間には石像は姿を消し、その代わりに村人たちが以前と変わらぬ姿でそこにいた。

村を襲撃した悪魔は村人を殺すことはしなかったようで、村人たちは全員がこの場にそろっていた。

「ここは……？」

「おい、どうなってるんだ！」

「あれ、わたし……」

地下室は瞬く間に喧騒に包まれた。叫ぶ男にヒステリーに陥る若い女、懸命に取り仕切ろうとする老人。横に立つベルンハルトは面倒くさそうな顔をしているが、僕もこの騒ぎを収めるのは面倒くさい。人差し指で彼をつつき、この騒ぎを収めるとジェスチャーをする。村人たちの声がうるさすぎて、普通にしゃべっても聞こえそうになかったのだ。

ベルンハルトはやれやれとでも言いたげに肩をすくめると、騒ぎを鎮めるための魔法を唱え始めた。

なんとか村人たちの騒ぎを収めたあと、僕はスタンさんと校長室で話していた。校長は応接室で客人と話しているので、一時的にここを借りているのだ。

「しかし、わしらが石になって六年も経ってたのか……実感がないわい」

あごひげを撫でつけながらスタンさんが言った。

「なにはともあれ、無事に解呪できてよかったです」

僕が言うと、スタンさんはうれしそうな顔で答えた。

「デレクはもともと賢かったが、まさかここまでの術士になっておるとはな。わしも鼻が高いわい」

先ほどの校長も似たようなことを言っていた。少し照れくさくなり、あわてて話題を変える。

「それより、スタンさんたちはこれからどうするんですか？ 村は壊滅したままだそうですし……」

「そのことなら問題はない。近くに最近廃業したホテルがあつてな、高畑さんがそこを買い取ってくださったんだ。村の皆さんはそこに泊まっていただこうと思っている」

いきなり高畑さんの名前が出てきて驚いた。しかしまあ、ホテルひとつを買い上げるとは太っ腹だ。校長の言葉にうなづき、僕は出された紅茶を啜った。

「積もる話もあるが、わしは村人たちと話してこなければ。今日はこれにて失礼させていただく」

スタンさんはそういつて立ち上がり、部屋を出て行った。まあ、

彼には家族がいるのだ。村で指導者的な立ち位置に在るとはいえ、いつまでもここに引き止めるのも無粋というものだろう。

さて。名残惜しいが、僕もそろそろ帰るとしようか。こっちに泊まる予定はないし、村人たちに会うたびに質問攻めにされるのでいい加減うんざりしてきた。

「では、僕も今日は帰ろうと思います」

「そうか、まあ元気でやりなさい」

「はい。では、さようなら」

校長室から廊下に出て、転移魔法でロンドンのゲート近くまで転移する。

転移した直後、僕の魔力を追跡してベルンハルトが転移してきたのと同時に背後から声をかけられた。

「やあ、デレク君。召喚成功したんだってね、おめでとう」

振り返ると、そこには高畑さんがいた。夏だというのにきちんとスーツを着ており、見るからに暑そうだ。もっとも、本人によればスーツに施してある魔法的な細工によって真夏に着てもちょうどいいらしいが。

「あ、高畑さん。お久しぶりです、ちょうどスタンさんたちの解呪が終わってこれからアリアドネーに帰るところです」

「解説も成功したんだね、良かったよ。僕もあの村には知り合いがいたから、ついでに会いに行くとしよう」

高畑さんはうれしそうに笑い、それからふと思い出したかのように手を打って言った。

「そういえば、デレク君は卒業後はどうするんだい？ 確か、もうそろそろ卒業だよな？」

「進路はまだ決まっていんですが、アリアドネー大で研究員をしないかと誘われてます。まあ、すごく惹かれているというわけではないんですが」

僕が答えると、高畑さんは頷いてから切り出した。

「実は、麻帆良はいま人員不足でね。デレク君、良かったら魔法先生としてうちに来てくれないかな？」

「魔法先生、ですか」

「ああ、教員の方も定年退職が相次いで人材不足なんだ。ネギ君には修行という形で来てもらうことになってるから、彼のサポートも兼ねてきてくれると嬉しいんだけど……」

麻帆良。確か日本の埼玉県にある学園都市で、関東魔法協会の本部がある場所だ。

これはちょうどいいかもしれない。かねてから日本には行きたかったし、教職にも惹かれている。それに、まだ幼いネギを一人で行かせるのも心配だ。高畑さんは忙しいだろうからネギの面倒を見き

れないだろうし、人員が不足してるならネギのサポートにさける人員もそういないはず。

「もちろん、いますぐに返事をしろとは言わないさ。来年の二月から来てほしいと思ってるから、おそくても一月までに返事をもらえればいいよ」

「そうですね、なかなか魅力的な提案ですから前向きに検討したいと思います」

「そうしてくれるとありがたい。僕もできる限り麻帆良にいたいんだけど、最近またきな臭い動きがあるからね。出張が多くて」

悠久の翼、か。高畑さんはここ数年、常に働きすぎな気がする。

「そんなに大変なら、僕も手伝いましょうか？ いまなら上級の悪魔を10匹ほどお貸しできますが」

僕がそう申し出ると、高畑さんはその提案に飛びついた。

「いいのかい、そんなに送ってもらって」

「僕の護衛はベルンハルトだけで十分ですから。じゃあ、どちらへ派遣すればいいでしょう？」

「それじゃあ、日本の麻帆良の学園長室へ送ってくれるかい？ 僕は明日には日本に戻るから、明日のお昼くらいに送ってもらえれば助かるな」

「わかりました。では、その時間に送ります」

「ありがとう。じゃあ、僕はそろそろ行くから」

「はい、お気をつけて」

懐から転移符を取り出して高畑さんは転移していった。僕も腕時計で時間を確認し、魔法世界に通じるゲートへと歩いていったのだ。
った。

9話

スタンさんたちの解呪を済ませた日から半年と少しの時間がたち、僕は麻帆良への就職を決めた。教員免許をぎりぎりで取得し、担当することになる政治経済のカリキュラムについても一通りの学習を終わらせた。時間が足りなかったのでアリアドネー大学秘蔵のダイオラマ魔法球を何度か使用したが、とりあえず最低限教師としてやっていけるだけの力は身についたと思う。

アリアドネーのアパートを引き払って、荷物を詰めた魔法のトランクを引きずって成田空港に着いた。時刻は早朝、今日から早速授業に入るとのことなので朝は早いのだ。

学園長からの電話によれば空港に迎えの人間が来るはずなので、トランクを引きずってうろうろする。ベルンハルトを霊体化させて傍に控えさせてあるから、魔法関係者ならすぐにわかるはずだ。迎えによこすのは魔法生徒だとのことだったので、そろそろ声をかけてくるだろう。

そんなことを考えていると、横合いから声をかけられた。

「あの、デレク・スプリングフィールド先生でしょうか？」

「ああ、君が迎えの人間か。わざわざありがとう」

声をかけてきたのは、線の細いサイドテールの女の子だった。竹刀袋を背負っているが、たぶん中身は真剣だろう。魔法で処理された金属の気配を感じ取れる。ベルンハルトの放つプレッシャーが気

になるのか、少し警戒しているようだった。

「桜咲、と申します。では、こちらにタクシーを待たせているのでついてきてください」

無愛想というわけではないが、どことなくとがった雰囲気の子だ。本人が意図してやっているかどうかはわからないが、論文の提出期限が迫った大学生みたいなびりぴりとした雰囲気放っている。

タクシーのトランクに荷物を放り込み、僕は後部座席に乗った。桜咲君は助手席に乗り込む。タクシーの運転手もどうやら魔法関係者らしく、僕の隣の席に霊体化したベルンハルトがいるのを感じたのか少し驚いた顔をした。まあ、現界しているときに比べて格段に落ちるとはいえ、それなりにプレッシャーが放たれているのだ。驚かないほうが無理がある。

転移符を使うものかと思っていたが、よく考えてみればあれはなかなか高価なマジックアイテムだ。学園長も組織を預かる人間だし、高畑さんほど太っ腹なお金の使い方はしないのだろう。

お金といえば、麻帆良の魔法先生はかなりいい給料が出る。僕の貯金は現在8億円ほどだが、この分では40歳までに40億円ほどをためることもできるかもしれない。そのくらいお金がたまれば仕事を引退しても悠々自適の隠居生活が送れるだろうし、楽しみだ。

タクシーは高速道路に乗ったが、車内はまるで葬式のように静かだ。運転手は運転に集中しており、桜咲君は窓の外をぼうつと眺めている。僕はもともと沈黙を苦痛としない人間だからどうでもいいのだが、隣に座っている霊体化状態のベルンハルトは退屈そうな顔

だ（霊体化が可能な悪魔と契約した術士は、霊体化状態の悪魔を
視できる）。

やがて、朝の七時ごろになると麻帆良の学園都市についた。運
手に礼を言つて電車を降り、荷物の入ったトランクを取り出す。

「ここからは電車で最寄り駅まで行つて、そこから徒歩で学園長室
に向かいます。着いてきてください」

ついでにこれも渡しておきます、と言つて桜咲君は僕にカードを
渡してきた。

「これは？」

「学園関係者のためのフリーパスです。交通機関は乗り放題になる
ほか、クレジットカードとしても使えます」

「なるほど、ありがとう」

タッチ式のカードらしく、自動改札にタッチして通り抜けること
ができた。なるほど、便利なものだ。

朝の電車はそれほど混んでいないが、それでもやはり生徒は多い。
赤毛の外人は目立つのか、女学生がこちらを見てなにやらひそひそ
と話している姿が目に入った。聴力を強化して内容を聞いてもいい
が、精神衛生上よろしくなさそうなのでやめておく。

桜咲君は竹刀袋を背負ったままつり革につかまり、目を閉じてい
る。手持ち無沙汰な僕は先日購入したフィンランドのメーカーが作

っている携帯電話を取り出し、インターネットに繋げる。メーカー内部にも魔法関係者はおり、空間拡張の魔法を使って内部にパソコン部品を詰め込むことでPC並みのスペックを備えた携帯電話を紹介してくれた。百二十万円などというとてもない値段だったが、いい買い物だったと思っている。

電車に乗り込んでから20分ほどすると、桜咲君が声をかけてきた。

「先生、次の駅が最寄り駅です」

「わかった」

短い言葉を交わし、携帯電話をコートの内ポケットにしまつて電車を降りる準備をする。

しばらくすると電車は止まり、ドアが開いた。生徒たちに先を譲り、トランクを引きずって後から降りる。

空はよく晴れており、空気は冷たくて新鮮だ。桜咲君と並んで歩き、学園長室へと向かう。

十分ほど歩き、女子中等部の校舎内にある学園長室についた。桜咲君が扉をノックすると、中から返事が返ってきた。

「入ってくれ」

電話で聞いた学園長の声だった。桜咲君は失礼します、と一声かけてから入室し、僕もそれに倣う。

学園長の頭は、なんとというか生物学的に突っ込みどころ満載だっ

たが、事前に高畑さんに教えてもらっていたので動揺はなかった。

「はじめまして、デレク・スプリングフィールドです。今日からお世話になります」

「おお、アリドネーから遠路はるばるよく来てくれたのう。疲れておるじやろう、かけてくれ」

学園長はそういつて、机の前にあるいすを指し示した。

「では、失礼します」

いすに腰掛け、トランクは傍らに置く。

「さっそくじゃがのう、警備員も引き受けてくれるということじゃから、シフト表を作ってみたのじゃ。見てくれるかのう?」

学園長が差し出したB5サイズの紙を受け取り、向こう一ヶ月のシフト表を眺める。

表には担当地区と時間、チームメンバーの枠があつた。チームメンバーのところに「桜咲」とあるのを見て、学園長に尋ねる。

「学園長、学生も警備に回しているのですか?」

「なにぶん人手が足りなくて、な……桜咲君は京都神鳴流の優秀な剣士じゃ、召喚術士のおぬしとは相性がよからう。それに、まだ地理も把握できておらんだらうし」

「……わかりました。じゃあ桜咲君、今日からよろしく頼む」

僕の後ろに立つ桜咲君に声をかけると、彼女は小さく頷いた。

「うむ、よかるう。それで住む場所についてじゃが、こちらのほうで家を用意させてもらった。女子校エリアの外縁にある一軒家じゃ、授業が終わったら桜咲君に案内させよう」

「ありがとうございます」

その後も授業や学校についての諸注意を受け、七時半には職員室のデスクに案内された。

「隣の机がネギ君のじゃな。デレク君には2 - Aの副担任も務めてもらうから、ネギ君のこともよろしく頼むぞ」

「承りました」

一通りのことを教え終わると、学園長は去っていった。

本来なら指導教員がつくはずだったが、アリアドネー大学のほうからお墨付きをもらったおかげで指導教員をつけることは免除された。周りの先生方に挨拶を済ませると、僕は机の脇に置いたトランクから教材ともろもろの資料を取りだし、机に置いた。政経の担当としては時事や政治事情にも通じていなければいけないため、教える内容の少なさに反して読まなければいけない資料は多いのだ。

時間割を見ると、今日の授業は2コマ。2 - Aと2 - Bだけだ。

2 - Aでは二時間目、2 - Bでは一時間目に授業をすることになっている。

コーヒーをすすり、授業で使うプリントを整理していると始業のチャイムが鳴った。クラス担任の先生たちは出席簿を持って教室に

行き、ほかの先生たちは授業の準備を始める。

ノートPCを起動して出席簿のデータを打ち込み、授業で配るプリントの印刷を終える。時計を見るとそろそろ授業が始める時間だったので、出席簿とプリントを持って2・Bの教室に向かった。

2・Bでの授業は無事に終わった。教員免許取得のために一ヶ月ほどアリアドネーの高校で研修をしていたので、その経験が役に立った。生徒はかなり元気で質問攻めにあったが、先ほど高畑さんに教えてもらった限りでは2・Aはもつと元気らしい。一抹の不安を感じながら、二時間目の授業の用意を済ませて教室へと向かった。

教科書を使って授業をすると、やる気のない生徒は寝てしまうものだ。僕のプリントは穴埋め式になっており、授業を聞くか自分で教科書が何かで調べないと空欄を埋められないように作ってある。授業のはじめに試験では空欄の語句を出すと宣言するので、そうすればやる気のない生徒も起きようとはするだろう……まあ、寝ていてもたたき起こせばいい話だが。

チャイムが鳴つてすぐに、僕は教室の扉を開けて中に入った。僕のことについてはネギがHRで連絡しているはずだが、果たしてど

うだろうか。ここに着てからまだ彼とは会っていないが、まだ9歳の彼が先生としてちゃんとやれるかどうかというのはなかなか不安だ。

教室に入ると、まず複数の鋭い視線を感じた。高畑さんから大体の事情は聞いているので、動じたりはしない。

「ネギ先生から連絡は行っていると思いますが、今日から政経の授業は僕が担当することになりました。デレク・スプリングフィールドです、よろしく」

僕が自己紹介をすると、生徒たちはざわめきだした。ネギめ、どうやら仕事をしなかったようだ。まあまだ子供だし、仕方がない。スプリングフィールド、という名前を聞いて反応したのが数人。

座席表と照らし合わせて確認すると、最もわかりやすい反応を見せたのは超君と龍宮君か。それと、真祖の吸血鬼、ダーク・エヴァンジェリン。彼女の事情についても大体は高畑さんから聞いているので、僕を見て驚くだろうということはある程度予想できていた。高畑さんいわく、僕は眼鏡をかけている以外はサウザンドマスターとだいぶ似ているようだし。

「先生！質問タイム、いいですか？」

特徴的な髪型の元氣そうな生徒が手を挙げた。朝倉君、か。

「10分だけなら。構わないよ。ただし、ほかのクラスに迷惑だらつるさくはしないように」

僕が釘を刺すと、彼女はうれしそうに笑ってうなづいた。

「年はいくつですか？」

「16歳。飛び級で大学を卒業したから」

うわ、思ったより年近いじゃん、とつぶやく声が聞こえた。

「彼女はいるんですか？」

「いないよ。興味はあるけど」

おお、とどよめく生徒たち。騒ぐなといったのが聞こえなかったのか。

「苗字が同じってことは、ネギ先生のお兄さん？」

「いや、従兄弟」

朝倉君はなにやら熱心にメモを取っている。

「それじゃ、最後の質問。このクラスで誰が一番かわいいと思う？」

……ずいぶんとまた、答えにくい質問だ。

「まだ会ったばかりだから一番かわいい子は決められないけど、一番かわいくないのは君だろうね」

苦笑しながら冗談を言っているとクラスは一瞬だけ静まり返り、それが

ら大爆笑に包まれた。おお、これがイギリス流のブラックジョークですか、とつぶやく声が聞こえた。

「うわひっで」

朝倉君も苦笑いし、困ったように頭をかいた。まあ、いやな質問をしたという自覚はあったのだろう。

「じゃあ、授業を始めようか」

収容がつかなくなりそうな空気を感じ取った僕はそう宣言し、プリントを配り始めたのだった。

10話

初日の授業は無事に終わり、家に荷物を置いてコンビニで買った弁当を食べ終えて風呂に入ると、すでに夜の十一時だった。弁当の容器を片付け、戦闘用の背広とコートを着て外へ出る。どちらもルーン文字による加工がなされており、ある程度の物理的な衝撃ならば障壁がなくても防げるようになっていいる。

「ベルンハルト、実体化してついてきてくれ」

傍らに控えていた悪魔に命じると、整った顔立ちで上品な装いの悪魔が現れた。レイピアは持っていないが、いつでも取り出せる状態だ。

貴族というだけあって、やはり気品とかそういうものが感じられる容貌だ。無表情でさえなければモテるだろうが、悪魔特有の不気味さもあるためどこか近寄りがたい。忠実だし有能なのだが、心底気を許せるわけではない。

悪魔を伴って世界中広場に赴くと、そこには真剣を手に持った桜咲君の姿があった。

「やあ、少し遅れたかな？」

「いえ、大丈夫です。それより、先生は何か武装したりはしないのですか？」

「僕はベルンハルトに任せるからいいさ。防御に関してはこれがあるしね」

桜咲君の質問に答え、懷から水銀の入った試験管を取り出して逆さに傾ける。30リットルの水銀のうちおよそ半分ほどを出し、球形にして傍らに待機させる。

「それは？」

「自動防御の兵装さ。ミサイルが直撃しても耐えられるくらいの防御性能はある。もっとも、攻撃はてんでだめだけど」

そうですか、と桜咲君は小さく頷いた。

「それでは、今日は私が前衛を勤めましょうか？」

「いや、桜咲君はとりあえず案内をしてくれ。敵を打ち倒すのはベールンハルトがやるから」

少し不満げな様子だが桜咲君は頷いた。2-Aの生徒にしては無口だが、僕にとってはありがたい。

しばらくすると、桜咲君の携帯電話が鳴った。

「はい、桜咲です……はい、西区B-5ですね。わかりました、向かいます」

どうやら、敵が侵入したようだ。

「十数匹の鬼が西のほうに侵入したとの知らせが入りました。今から向かいましょう」

そういうと、桜咲君は駆け出した。気を使っているのか、かなり

速い速度だ。

浮遊術を使って飛行し、彼女の後を追う。ベルンハルトはレイピアを虚空から取り出し、同様に桜咲君を追いつめた。森の中を移動しているため飛行しにくい、機を回避できる程度には飛べる。問題は無い。

5分ほど走ると、桜咲君は急に立ち止まった。僕も地上に降り、彼女に話しかける。

「見えたな、あれか？」

「はい、おそらくあれでしょう」

僕たちの目線の先には十数匹の鬼がいた。警戒しながら前進しており、50mほど離れた僕たちには気づいていないようだ。

「ベルンハルト、やってくれ。なるべく木を傷つけないように」

「了解した」

悪魔は無表情のまま頷き、転移魔法で姿を消した。直後、前進していた鬼たちの背後にベルンハルトが出現し、レイピアを抜き払った。

巨大な魔力に反応した鬼たちが驚いて振り向いた瞬間、ベルンハルトのレイピアが稲妻のような勢いで一匹の鬼を刺し貫いた。

「ぐ、ぐふっ……」

ベルンハルトの使うレイピアには、刺した相手の生命力を奪い取

る力がある。現世ではまずお目にかかれなほどの強力なマジックアイテムだ。

生命力を一瞬で吸い尽くされた鬼は塵となって崩れ落ち、残った鬼たちは逆上してベルンハルトに襲い掛かる。

リーダー格なのだろうか、ひときわ巨大な鬼が大剣を構えてベルンハルトとの間合いを詰める。

詰め寄った鬼が大剣を袈裟懸けに斬り下げたのと同時にレイピアが閃き、大鬼の大剣を握る手を貫く。レイピアが赤く輝いたかと思うと、次の瞬間にはリーダー格の鬼も塵となった。

血のついたレイピアを右手でだらりと下げ、ベルンハルトが無表情のまま一步を踏み出す。すると、プレッシャーに押された鬼たちは一步後退し、中には怯えをあらわにする鬼もいた。

ベルンハルトと退治した鬼たちが獲物を構えたそのとき——ベルンハルトが大きく前方に踏み込んだ。

右手のレイピアが目にも留まらぬ速さで三度繰り出され、三匹の鬼が生気の失せた顔で倒れこみ、送還された。レイピアが体を貫いた時間が一瞬だったために、中途半端に生命力を吸い取られたのだ。

ベルンハルトは相変わらず無表情で、それが鬼たちには不気味に見えたようだ。ふいに、一匹の鬼が叫び声を上げて逃走し——ほかの鬼もそれに続いた。

「デレク先生、行きましょう！」

鬼たちが向かった方角は女子寮の方だ。桜咲君はクラスメイトを守るためか、少し熱くなっている。

「いや、大丈夫だ。見てごらん、ベルンハルトは魔法も使えるんだ」

ベルンハルトはレイピアを発動体として魔法を行使する。悪魔は発動体がなくても魔法を使えるが、あのレイピアは発動体としても抜群に優秀なのだ。

レイピアが青く発光したかと思うと、その切っ先からいくつもの水の蛇が出現する。蛇頭の鞭と化した剣をベルンハルトが振るうと、蛇はすさまじいスピードで鬼たちに迫り――次々に首筋を食いちぎり、鬼を殺していった。すでに鬼とは30ほど引き離されているベルンハルトだが、剣を一振りしただけでほとんどの鬼を葬ったようだ。残っている鬼は、二匹。いずれも恐怖の色を隠さず。取り乱しながら女子寮の方角へと駆けていく。

ベルンハルトが面倒くさそうに剣を一振りすると、勢いよく鬼に迫った水の蛇が鬼の背中を貫く。2匹の鬼はともに水の蛇に貫かれ、そのまま送還された。

「ほら、大丈夫だったでしょ？」

「ええ、しかしすごい剣ですね。剣術も凄まじいものがありました。あの剣も世界最高クラスのマジックアイテムでしょう」

桜咲君はベルンハルトの剣術を見て興奮しているようだ。まあ、戦闘が始まってからすべての鬼が始末されるまで1分もかかっていないのだ。その上、無傷どころか反撃さえされなかったのだから、ベルンハルトの実力はすさまじい。桜咲君も剣士だというから、彼のすごさがわかるのだろう。

「ああ、彼も最高級の一振りだといっていたな。とりあえず、警備を続けようか」

「はい、先生」

さいわい、倒木や火災などの周囲への被害はほとんどない。問題なく見回りを続けられるだろう。

シフトは深夜三時までだ。速やかに現場から立ち去り、僕と桜咲君は警備を続けた。

午前三時。あ後は小規模な戦闘が2回ほどだけあったが、いずれもベルンハルトが片をつけた。

桜咲は相変わらず口数が少ないが、少しは打ち解けてくれた……と思っていた。

「そつえば、こんな時間まで起きてて授業は大丈夫なのか？　まあ寝てもいいけど、成績に響かせるのは感心しないな」

「私はもともと成績はいいほうではありませんが……まあ、少しだけ寝ちゃったりは、します」

すいません、と謝る桜咲。

高畑さんや学園長に聞いた限り、この子は何か強いコンプレックスがあつて少々自虐的な思考をする癖があるとか。彼らは直接言うことを避けたが、桜咲君を一目見ればわかる。この子はきっと、何か人間以外の生き物の血が混じっているのだろう。

まあ、心根は優しいようだし。いつか必ず、本人が答えを得る日も来るだろう。純粹に親切心からアドバイスしたとしても、純粹な人間である僕が何を言ったところで無駄だろう。そこまで信頼されているわけでもないし、僕には彼女の気持ちはわからない。アドバイスのしようがないのだ。

「僕はあと何匹か悪魔を使役できるし、きついなら警備を休んでも大丈夫だと思うけど。あまり成績がよくないなら、なおさら」

「いえ、それには及びません。嫌々やっているのではなく、私が自発的にやっていることですから」

「そうか、それならいいんだ。まあ、あまり無理して成績を落とさないように」

「はい、先生」

それじゃあ、と女子寮の前で別れる。転移魔法を使って自宅まで戻ってもいいが、先ほどからどうもあとをつけられているようだ…
…夜の学園都市を歩き、特に人気のないルートで適当に歩き回る。

しばらくそうしていると、ふいに頭上の街路樹から声が聞こえた。

「つけられてるのを知りながら一人で散歩とは、余裕だな」

「それほど大きな魔力は感じなかったものでね」

ベルンハルトはすでに魔界に返した。とどめておくのも魔力を消費するし、今日は帰ったら自宅に結界とトラップを設置しなければいけない。余計な魔力消費は抑えたいのだ。

「マクダウエルか。何の用だ」

「なに、あの男の血脈だというから実力を身に來ただけさ。思ったよりやるじゃないか、若造」

「落ちぶれた吸血鬼が何を偉そうに。言っておくが、血はやらんぞ。帰れ」

教室で接するならば生徒として接するが、なにせ相手は元賞金首の極悪人だ。高畑さんは悪い子ではないといていたが、用心するに越したことはない。

転移の魔法を準備し、いつでも発動できるようにしておく。今の状態の闇の福音ならば少なくとも負けはしないだろうが、交戦は望ましくない。一応だが、相手もここの警備員なのだ。

「貴様の血など呪いを解くには役立たん、あの男の因子が薄すぎる。まあいい、いまのところ貴様と対決する必要はなさそうだ」

ククク、と笑い吸血鬼は去っていった。何が可笑しいのやら、さすがに異種族の思考回路はよくわからない。

まあ、別に敵対する必要もないし。生徒としておとなしくやっていてくれればそれでいいのだが、はたしてどうなることやら。

11話

麻帆良に着任してから一か月ほどが経った。

僕自身は特にこれといった失敗もなく教師をやっているわけだが、ネギの方は大変そうだ。クラス担任をしている彼と副担任である僕とでは大変さが違うのだろうけど、何度か魔法バレをしそうになったのには肝を冷やした。なにせ、彼とは親戚ということに通っている。彼が魔法使いだとばれたら僕も疑われるだろうし、いろいろと細かくフォローしていたらいつの間にか一か月が経っていた。

今日は学園長に呼び出されている。早朝の校舎内を歩きながら、またネギがなにかやらかしたのかと首をひねりつつ、学園長室へと向かった。まあ、基本的に学園長や高畑さんをはじめとする先生方は心の広い人ばかりだ。ネギが問題を起こしても即処分されるようなことはないはず。

「失礼します、デレク・スプリングフィールドです」

学園長室の扉をノックして名乗ると、中から学園長が返事をした。

「入ってくれ」

扉を開けて一礼し、学園長の机の前に立つ。昨日も夜遅くまで警備のシフトが入っていたためか、少し眠い。あくびをかみ殺しつつ学園長の話を聞く。

「実はのう、そろそろネギ君を正式な教員にするための試練を出そうと思っているのじゃ」

ああ、そういうことか。そろそろ三学期も終わるころだし、そういう動きがあってもおかしくはない。

「教師というと、魔法先生ということですか？」

「いや、さすがにそれは荷が重いじゃろう。彼にはあくまで先生として働いてもらう」

僕が頷くと、学園長は言葉を続けた。

「試練についてじゃが、彼には数人の生徒を連れて数日の間図書館島に潜ってもらおうかと考えておる」

図書館島、か。ネギのサポートで忙しくてまだ行ったことはないが、噂によれば危険な場所だということだ。ネギは魔法が使えるからともかく、一般生徒を連れて行くのはいかなものか。学園長のことだから手は打ってあるだろうが、しかし。

「安全性は十分に確保されているのですか？ 後になってから『想定外だった』なんて言わないで下さいよ」

「その点は十分に留意しておる。司書が秘密裏に後をつけることになっておるから、危なくなったら彼が助けに入る手はずじゃ」

司書、ねえ。どれほど信頼がおける人物なのかはわからないが、学園長は相当の信頼を置いているようだし。問題はないか。

「わかりました。それで、僕はネギに試練について教えればいいのですね」

「うむ。この手紙を渡してくれ、建前上は2 - Aの最下位脱出が試験ということになっておるが……まあ、そこは何とかなるじやろう。もともと相坂さよの人数を加算しているからテストの点が悪いのじや、今回は彼女を欠席扱いにすれば最下位脱出はできるじやろう」

相坂さよ。ベルンハルト曰く、相当に隠密性の高い地縛霊らしい。僕は目が良くないから目視することはできないのだが、少なくとも悪意のある霊魂ではないとのことだ。

「確かに承りました。では、僕はこれで失礼します」

「ああ、今日もよろしく頼むぞい」

手紙を受け取って、一礼してから扉をあけて出ようとする。すると、学園長があわてて付け足すのが聞こえた。

「それとデレク君、君は刹那君を抑えておいてくれ。彼女の性格では司書と衝突するかもしれん、やり方は一任するゆえ、な」

振り返って頷き、僕は部屋を出た。

職員室につくと、ちょうどネギは机で教科書と文法書を開いていた。どうやら、次の授業のために教材研究をしているらしい。彼の勤勉さを好ましく思いながら、声をかける。

「ネギ、ちょっといいかい？」

「どうしたの、デレク」

振り向いた彼に、学園長からの手紙を渡す。

「学園長からの最終課題だそうだ。内容は生徒には教えるな、とのこと」

「ありがとう、読んでみるね」

僕は椅子に座り、新聞を読み始めた。こちらに着任してからは政経の教師として3紙を読むことを己に課しているが、新聞というのは意外と面白い。

しずな先生が淹れてくれたコーヒーを啜りつつ、新聞をめくる。

「うーん、どうしようか……」

「どうしたんだ？」

見ると、ネギは見るからにぐったりとして机に突っ伏している。

「2・Aの成績データは知ってるでしょ、あれを最下位から脱出させるなんてどうすればいいんだろう」

ネギは困り顔だった。何かにつけて魔法に頼る悪癖はだいぶ影をひそめてきたが、追い込まれれば最終的には魔法に頼ってしまうだろう。それはあまり望ましいことではないので、僕は助け舟を出す。

「特に成績の悪い連中が少しでも伸びれば全体としてはまともになるんだろうな。特別に補講でもやってみたら？」

「それで伸びるんだったらタカミチも苦勞しなかったんだろうけど

ね……」

一理ある。

「まあ、これは普通の先生になるための試練なんだ。わかってるとは思っけど、アレは使っなよ」

「うん、それはもう身に染みたよ」

まずは人前で魔法という単語を口にさせない。これさえできれば、賢いこの子なら言わなくても隠匿については気を使ってくれるようになってきた。

「じゃ、僕はそろそろHRに行かなきゃ」

「ああ、がんばれよ」

チャイムが鳴ると、ネギはあわただしく職員室を出ていった。僕もコーヒーを啜り、新聞を読むのを再開した。まあ、ネギなら何とか乗り切るだろうと楽観的に考えて。

その日の夜、学園長から電話が入った。ネギたちは無事に図書館

島に到着したとのことで、司書が尾行を始めたそうだ。くれぐれも生徒にけがはさせないでください、と釘をさして電話を切る。

まずは、桜咲の足止め。これは問題ない。

彼女はかねてからベルンハルトとの稽古を望んでいるようだった。これまではただでさえ睡眠時間が少ない彼女を気遣って稽古はさせなかったのだが、今日はベルンハルトに命令して稽古につきあうように言っておいた。彼女は稽古には尋常じゃないくらい打ち込むし、仮に近衛君がいないことに気付いたとしてもベルンハルトが足止めをしてくれる。

自宅の冷蔵庫を開けると、中には何も入っていなかった。まあ、言い訳をするならば麻帆良には美味しい店が多すぎるのだ。自炊は面倒くさいし、つつい外食が多くなるため食費もかさむ。警備の手当てはかなりの額だが、これではお金がたまらない。そうは思いつつも、やはり僕は財布を握って自宅を出た。

さて、どこに行こうかと考えながら夜道を歩いていると、携帯電話が鳴った。

「はい、スプリングフィールドです」

「デレク先生、今日も夕食はもう食べたか？ まだならうちに来るといいアル、安くしとくヨ」

電話をかけてきたのは2・Aの天才少女、超鈴音だった。なにやら僕に興味があるらしく、ことあるごとに夕食に誘ってくる。吹っかけてくる話題が世界平和とか魔法使いの理想だとか面倒くさい話

題ばかりでここ最近では敬遠していたのだが、安くしてくれるというのなら仕方がない。それに、今夜はなんだか哲学的な気分だ。食後のコーヒーを飲みながら彼女と論争をするのもいいかもしれない。

「ああ、それなら向かわせてもらっ」

彼女自身は魔法使いではないそうだが、魔法の存在は知っているらしい。ガンドルフィーニさんやシスター・シャークティは彼女に対してあまり良いイメージを持っていないようだが、そもそも僕はあの人たちからはそれほど評価されていない。酸いも甘いも嘗め尽くした高畑さんや学園長は僕の思想を尊重してくれるが、正義感の強いガンドルフィーニさんたちは積極的に活動をしない僕に対して不満を持っているようだ。まあ、だからといって自分たちの思想を押し付けたりしてこないあたりは人格者だと思うのだが。いい人たちであることは確かだ。

時刻は午後九時半。一般生徒の寮の門限は九時だから、出歩いている生徒はほとんどいない。

生徒の出している屋台も本来ならば店じまいを始めている時間だ。超包子は人気があつてオーナーも優等生なので見逃されているようだが。

しばらく歩くと超包子が見えた。まだ明かりはついていますが、客は一人もいない。

「やあ先生、来てくれてうれしいヨ」

近づくと、超君が声をかけてきた。屋台の制服は脱いでおり、学校の制服を着ている。

「おごってくれと聞いてやってきました」

「……まあいいネ、どうせ利益は莫大に出ているアル」

「冗談で言ってみたが、どうやら超君は本気にしたようだ。好都合ではある。」

「さ、座るネ。料理は用意できてるヨ」

手際のいいことに、テーブルにはすでに料理が置かれていた。イスに座り、手を合わせて言う。

「じゃ、いただきます」

食後、超君が入れてくれたコーヒーを飲みながら彼女が食器を片付ける様子をぼうつと眺める。どちらかといえば中華より洋食のほうが好きだが、ここの食事はそんなことが問題にもならないくらいに美味だ。デザートは杏仁豆腐をつつきながら、僕はコーヒーを啜った。

片づけを終えた超君は僕の向かいに座り、うれしそうな顔で口を

開いた。

「今日は……そうネ、持てるものの責任、ということについて話す力」

黙ってコーヒーを啜り、先を続けると無言で促す。

「たとえばデレク先生、あなたは召喚術士としてはだいぶ優秀だが、その力を人のために生かしたのは故郷の知り合いを救ったときのみと聞いている。ノブレス・オブリージュという言葉があるが、あなたは自分の力を人のために生かすべきだとは考えないの力？」

なかなか難しい質問だ、が。

「僕の力はもともと村の人を救うために身につけたものだし、それに召喚術の研究には役に立っている。日本の大学なんかはクソの役にも立たないような研究をしてるってよく言われるけど、アカデミズムってのは本来そういうものだろ？僕は魔法使いというより魔法研究者だ、学んだことを世の中に還元しようとは思わないね」

それに、下手に紛争などに介入しても恨みを買っただけだし。と内心で付け加える。

「なるほど。でも先生、先生はもし目の前で悪漢に襲われる女の子がいたとしても助けないの力？結局、先生が力を使おうとしないのはアカデミズムなんていう崇高な理由からじゃなくて、単に面倒くさいからではないの力」

「痛いところをつくね。確かに面倒くさいって言う気持ちもあるけど、たとえば目の前の女の子を助けるとしてもそれは単にいやな気

持ちになるから、ということだよ。目の前の少女がひどい目にあえば僕は悲しいと思うけど、地球の裏側にいる少年がテロに巻き込まれても実感が無い。つまり、僕の主観世界には地球の裏側の少年ははじめから存在しないし、存在しないものを救う必要はないというわけさ」

超君は真剣な顔で目を見て問いかけてくるが、なにかを隠しているように思えてならない。別に悪いことをたくらんでいるわけでもないのだろうが、何か心の奥底に秘めるものがあるのだろう。

「じゃあ、先生はたとえば地球の裏側で苦しんでいる子供を救おうとする魔法使いがいたとして、それをどう思う？」

「立派だとは思っよ。積極的に手伝おうとは思わないけど、ちょっとした報酬をくれるなら手伝うくらいには」

超君は何かを考え込むように虚空を見つめ、しばらく考え込んだ後に質問してきた。

「なら先生、未来の百人を救うために今一人を切り捨てるという思想、どう思う？」

「自分が切り捨てられないのなら応援するね。合理的なのは嫌いじゃない」

即答する。

「目的のために手段を選ばない、っていうのはあまり美しくないけど。それでも、採算が取れるならそれはいいことだと思うよ」

補足すると、超君はうれしそうに笑った。

「私も同意見ネ。いや、先生は話がわかってよらしいアル」

「まあ、僕は魔法使いの中では異端だから。ほかの魔法使い、たとえば高畑さんとかネギなんかはきつとそうは思わないだろうし」

「そのくらいはわかってるネ。先生が銃の密売をやっていることをつい最近知ったから興味を持ったアル」

「へえ、そんな情報どこで」

「お金は口を滑らすものネ。魔法使いには普及していない考えだが」

ニコニコと笑っているが、相応の情報網を持っている油断ならない人間なのか。いや、むしろ魔法使いがお人よし過ぎるのだ、超君の考え方はむしろ一般人よりだとも言える。

そう、魔法使いはあまりに人を信じすぎる。研究・調査目的だと言いつくすれば悪魔でもゴーレムでもゲートを通過できるし、大学の機密だといえれば手荷物検査もなくゲートを行き来できる。最高学府の権威もあったが、基本的に魔法使いは同胞を無条件に信賴してしまふきらいがある。

「それで話の続きだガ……」

超君との議論は、結局その後3時間も続いたのだった。

11話（後書き）

皆様の感想を拝見する限り、どうも僕は心情描写や細かい設定の記述などが抜けてしまう傾向にあるようです。

もちろんこれからはそういった点に気をつけようと思いますが、疑問な点や矛盾している点などがあれば、どんどん質問してください。できる限り対応しようと思います。厳しいご意見など聞かせていただければ幸いです。

12話

結局、ネギたちは無事に図書館島から帰ってきた。試験の結果も上々で、驚くべきことに2 - Aは学年一位を取るといふ快挙を成し遂げた。

すでに春休みに入っている。来年も継続して3 - Aの副担任を務めることになったが、まあネギもだいぶ教師らしくなってきたことだし、トラブルの類は自力で解決するだろう。

そんなことを考えながら学園長室へと向かう。なにやらまたネギに関する相談とかで、出張から帰ってきた高畑さんと僕、学園長の三人だけで話したいことがあるそうだ。

特に部活の顧問などはやっていないため、休みの日に学校に呼び出されるのは正直な話面倒くさい。が、どうしてもきてほしいとのことなのでこうしてネクタイを締めて登校しているというわけだ。

「失礼します」

ノックをして入室すると、すでに学園長と高畑さんは部屋にいた。

「では、デレク君もきたことじゃし、話そうかの」

学園長は湯飲みから茶を一口啜ると、話し出した。

「実は、半年ほど前からおきていた桜通りの吸血鬼事件。やはり犯人はエヴァンジェリンだったようでのう、これまで確証はなかったが今回は監視カメラに映っておった」

闇の福音か。さては、呪いを解くためにネギの血を吸うつもりだろう。学園長は少し不機嫌そうに続けた。

「これまでののりくらりとごまかしておったが、ガンドルフィー二君をはじめとする若い先生方は憤っておってな。教え子が襲われるから当然のことじゃが」

学園長はため息をついた。

「学園長、それならマクダウェルを魔法世界の収容所かどこかに引き渡せばいいのでは？」

僕が質問すると、学園長は答えた。

「いや、サウザンドマスターの呪いのせいで彼女は学園結界の外に出られんのじゃ」

なるほど、それはそれは。

「そもそも、誰かを襲うなら刑罰を兼ねて学校に閉じ込めればいいのでは？ 地下牢でも作ってそこに放り込めば呪いも何とかなるでしょうし」

僕がそう言うと、高畑さんが苦い顔をして言った。

「デレク君、彼女も辛いんだ」

高畑さんのことは尊敬しているが、今度ばかりは彼の意見には賛成できない。

「これまでに何人も生徒が襲われていますし、もともとここに連れてこられたのだって自業自得じゃないですか。脱獄を試みる囚人を見逃せと、そういうことですか？」

聞いた話では、襲われた女子生徒は手当てもされず放置されているという……野犬や、もしかしたら男子生徒に襲われる可能性もあるし、教え子ではないとはいえ生徒が襲われているのだ。見過ごすのは後味が悪い。

「僕たちは親御さんから大切な子供を預かっているんです。生徒を危険から守る責任があります。それに、いまならまだ手は打てますが万が一呪いを解くようなことがあれば生徒たちだけではなく僕たち教員も危険に晒されるんです。早急に手を打たなければ」

柄にもなく熱くなっているのが自分でもわかるが、それほど看過できない事態だ。

「結局、先生方はマクダウェルと親交があるから甘くなってるんじゃないですか？ 下手したら生徒が凍死する可能性だってあったんですよ、それを——」

「口を慎んでくれ、デレク君。教育者として君の言っていることは正しいかもしれないが、学園長の話を聞いてからにしてくれ」

高畑さんが僕の言葉を遮る。

「……はい」

少し言い過ぎたのは事実だが、それでもやはり不満は残る。

「エヴァンジェリンにはわしから釘をさしておく。それに、君の理屈で言うなら生徒が襲われているのは彼女をここに連れてきたサウザンドマスターの責任でもある。彼がいない以上、その責任はネギ君と君に引き継いでもらわねばな」

「会ったこともない親戚の尻拭いをしろと？ 責任の押し付け合いなんかしてる暇があったらとっととマクダウエルを捕まえるべきです」

「デレク君！」

学園長の言葉にかつとなった僕を高畑さんが一喝する。

「本来ならもうひとつ証拠がそろってから釘をさす予定じゃったが、よろしい。明日にでも彼女を呼びつけて約束させよう、これでよいな？」

「……それで彼女が襲うのをやめるとでも？」

学園長の言葉に反論する。学園長も苦々しげな顔だが、僕もきつと苦虫を噛み潰したような顔をしているに違いない。

「ああ、約束しよう」

「では、もし次に被害者が出た場合——彼女の処分はサウザンドマスターの親戚である僕が、責任を持って行いましょう。それでいいですね？」

「……いいじやろ。じゃが、それまではくれぐれも手は出さぬよ
う」

「わかりました。では、失礼させていただきます」

正直、腹の虫は収まらない。だが、ここで食い下がっても無駄だろう。

一礼して学園長室を辞去すると、僕は周囲に人がいないことを確認して転移魔法で自宅へと戻った。

学園長との話し合いから一週間がたち、新学期が始まった。いまのところ、被害者は出ていないようだ。油断はできないが、学園長にも何か考えがあるのだろうか、という考えも頭の片隅に浮かんできた。

初日の授業を無事に終えて自宅に帰り、食事を済ませてから風呂に入る。

風呂から上がって携帯電話をチェックすると、着信履歴に超の名前があった。頻繁に超包子を利用していたため、いつの間にかアドレスを交換していたのだ。

「デレクだけど、電話した？」

超に電話し、問いかける。

「ああデレク先生。ひとついいニュースがあるのだが、今からうちに来ないか？ ネギ坊主に関係することなんだが、わけあってネギ坊主やほかの先生には教えられないことなんだ」

「わかった、今からいく」

「お待ちしてるネ」

何かを面白がるような超の声音に不安感をあおられた僕は、スーツを着て外へ出た。いい加減新しい服を買わなければいけないが、面倒くさいので私服を用意していないのだ。スーツならば十数着あるため、いつもはそれらを着まわしている。

それにしても、ネギに関係する情報でわざわざ僕に知らせたいような情報とはいったいなんだろうか。彼女の情報網はどうやらかなりものようだから、くだらないことではないと思うのだが。

もう四月なのでさすがにコートは着ない。銃器の類も持たずに家を出る。

超包子に着くと、いつもと同じように超が一人で待っていた。

「よく来たネ、先生」

「やあ。それで、情報っていうのは？」

「その前に、コーヒーはいかがかな？」

「まあ、もらっておこう」

テーブルにすわり、出されたコーヒーに口をつける。超はなにやら怪しげな笑みを浮かべて僕を見ているが、果たしてどんな情報を持っているのだろうか。

「で？」

「気が短い男は嫌われるネ、先生」

軽口を黙殺すると、超はやれやれと肩をすくめてから話し始めた。

「そうネ、話す前に一つだけ……私の情報に価値を認めてくれるなら、今後一回だけ私の頼みごとを無条件に聞いてくれないか？ もちろん、そんなに無茶なことを言うわけではないヨ」

「ああ、いいだろう」

どうせ、武器を提供しろとか魔法について教えろとかそういう類のことだろう。ここ一ヶ月ほど彼女と付き合ってきて、彼女が悪人でないということはうすうす理解できた。少し理想主義に走ってるくらいが無くもないが、少なくとも人の信頼を裏切るようなことはしないはずだ。

「よろしい。では、単刀直入に言おうカ。エヴァンジェリンは次の停電の日に結界を破り、魔力を取り戻してネギ坊主を襲うつもりネ」

「……その情報、どこから？」

「茶々丸がエヴァンジェリンの従者だということは知ってるネ？
彼女を作ったのは私アル、エヴァンジェリンの計画は筒抜けヨ」

なるほど、大方メンテナンスの際にメモリーを覗いたかなにかだ
ろう。しかし。

「いいのか、そんなことをしゃべって？ 口止めされていないのか
？」

「エヴァンジェリンは『正義の味方気取りの魔法使いにはくれぐれ
も話すな』としか言っていないネ。先生は正義の味方を目指している
わけではないから大丈夫アル」

それは屁理屈というものだろう。

「はは、そんなことで怒るほど彼女は小さい器じゃないヨ。これは
彼女のミス、私の行動は契約には反してないヨ」

「それならいいんだけど……しかし、停電の日か。ちょうど一週間
後だな」

空になったコーヒークップを置き、僕は立ち上がった。

「ありがとう、約束は守ることにするよ。じゃ、僕は用事ができた
から」

「せいぜいがんばるネ、先生」

ニヤリと笑って僕を見送る超に背を向け、僕は自宅へと歩き出した。

とりあえずは、ネギにこのことを教えなければいけないだろう。彼はすでに同室者の神楽坂君には魔法バレしてしまったようだが、この上厄介ごとに見舞われたら近衛君にまで魔法がばれてしまうかもしれない。それに、マクダウエルがネギを狙っている以上、生徒たちのいる女子寮に彼をおいておくのはほかの生徒を危険に晒すことになる。

高畑さんや学園長にもこのことを報告しなければいけない。超の情報が間違っている可能性もありえるが、少しでも情報が真である可能性がある以上この責任者である学園長には報告をするべきだろう。

高畑さんから聞いたマクダウエルの経歴が本当ならば、彼女にも幾分かの同情の余地はあるだろう。だが、しかし。だからといって生徒を襲っていいわけではないし、まして自分を封印した人間の息子を襲ってもいいなど考えるのは馬鹿げている。

そんなことを考えながら、僕は自宅へと足を速めたのだった。

13話

翌日、僕は起床すると適当に朝食をとり、シャワーを浴びてからスーツに着替えた。

昨晚よりは少し頭も落ち着き、冷静な思考が戻ってくる。

まずは、闇の福音。彼女が結界を破って力を取り戻せば、この学園で彼女に太刀打ちできる人間はほとんどいないだろう。学園長の戦闘能力は未知数だが、伝説の真祖に太刀打ちできるかと問われれば怪しいだろう。なにせ、彼は最盛期のころよりだいぶん年を取り、衰えている。闇の福音が全盛期の力を取り戻せばあっけなく敗退してしまうだろう。

高畑さん。この人も闇の福音には敵わないだろう。旧知の間柄ということで戦意が鈍るだろうし、そもそも戦闘能力からして大幅に劣っている。

ベルンハルト。契約状態でなければ、勝つことは難しくても同じ土俵に立つことはできるらしい。が、契約によって弱体化している現状では足止めがせいぜいとのことだ。

そのほかの魔法先生も戦意こそ旺盛だが戦力にならないし、つまりこの学園に彼女に対抗できる存在はいないということになる。

となれば。最善の一手は、彼女が結界を破る前に捕縛するか、停電そのものを中止するかどうかだろう。後者は単なる問題の先送りにはかならないし、できれば彼女の計画を暴いたうえで捕縛し、誓約書でも書かせるのが手っ取り早いのか。なかなか面倒だが、生徒の安全

と魔法界の平和がかかっている。手を抜くことは許されないだろう。教材を入れたカバンを持ち、家を出る。時刻は六時半、生徒の姿もちらほらと見かける。

学校につくと周りの先生に挨拶してからデスクにかばんをき、電話をかける。

「学園長じゃが」

「おはようございます、デレクです。少々話したいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「いいじゃろう、幸い今は来客もないことじゃし」

「では、いまからお伺いします」

電話を置くと、カバンをそのままに職員室から出る。元気にあいさつをしてくる生徒に笑顔で答えながら学園長室へと向かった。

「失礼します」

ノックしてから扉を開け、中に入る。今日はタカハタさんはいないようで、学園長室にいるのは学園長一人だった。

「やはり、エヴァンジェリンのことかのか？」

挨拶もそこそこに学園長は問いかけてきた。基本的にエヴァンジェリンには同情的だが、やはり生徒の安全にかかわる事態を見過ごすことはできないのだろう。個人としての彼と教育者としての彼の

板挟みになっていることが伺えるような、苦しげな表情をしている。

「はい。生徒の一人から聞き捨てならない情報を聞いたので、報告に伺いました」

「……その生徒の名前は？」

「超鈴音。3 - Aの生徒です、ご存知かとは思いますが」

彼女は超包子のオーナーでもあり校内一の天才でもある少女だ。魔法使いたちとも何度か小さなトラブルを起こしているというし、学園長は聞いたことがあるはず。

はたして、学園長はその名前を聞くとよりいっそう深刻そうな顔になった。

「彼女の話によれば、マクダウエルは大停電の日に結界を破り、力を取り戻してネギの血を吸い、呪いを解こうと計画しているようです」

沈黙する学園長にそう言うと、学園長は大きくため息をついた。

「とりあえず、生徒の血を吸うことはしないと誓ったんじゃないか……ネギ先生のことまでは考えてなかったわしの落ち度じゃ。珍しく殊勝に謝罪したもので、油断しておった」

学園長室を沈黙が支配する。僕は学園長がどのような対策をとるのか、沈黙したまま待ち続けた。ここで焦っても仕方がないし、どうやら学園長もマクダウエルに対して対策をとらなければいけないとは認めたようだ。

「停電の夜は外部からの侵入にほとんどの戦力を割くことになるじやろう。となれば、いったん電力による封印が解けることを想定したうえで、あらかじめ対策をとっておくしか手の打ちようがないのう。封印の復旧にどれほどの時間がかかるかを担当者と話し合った上で、エヴァンジェリンの足止めに参加するメンバーを選抜するのが最善じやろうか」

さすがに策謀家としても名前をとどろかせているだけあって、学園長の頭の回転は速かった。

「ネギ君を下手に隠しても一般生徒を人質に取られるのが関の山じやろうな。ネギ君にはわしからの課題だと言い含めて、エヴァンジェリンを任せるしかないじやろう。誰か魔法先生や魔法生徒をサポートにつけて、封印が復旧するまでの時間稼ぎをもらうことになる」

「ええ、だいたいそれでいいと思います。あとはお任せしてよろしいですか？」

「ああ、じゃが今回の作戦は君に頼るところも大きくなるじやろう。ネギ君が狙われることがわかつとる以上、彼のサポートである君にもエヴァンジェリンと戦う役目は割り振られるじやろう。覚悟はしておいとくれ」

「わかりました。では、失礼します」

満足できる結果は得られた。できることならばこれ以上の助力も得たかったが、これだけでできれば上々というものだろう。

学園長室から辞去し、僕は職員室へと向かったのだった。

その日の放課後、授業を終えて職員室に帰ってきたネギに僕はこっそりと耳打ちした。

「学園長先生からの新しい課題があるから、あとで僕の携帯に電話してくれ」

「わかったよ、デレク」

ネギもだいぶ教師らしくなってきた、ここにやってきたときとは顔つきが変わってきた。精神面に関しては順調に成長しているが、問題は戦闘力だ。簡易な認識障害術を発動させ、僕はネギに問いかけた。

「そういえばネギ、もうパートナー候補は見つけたのか？」

そういえば、僕もネギもまだパートナーを見つけていない。僕はマギステル・マギを目指しているわけじゃないからいいとしても、ネギくらいの年になれば候補の2・3人は必要だろう。表側の生徒を巻き込むのは論外だが、魔法生徒との仮契約程度ならむしろ勧めておくべきか。さいわい、契約の術式に関しては僕はプロフェッシ

ヨナルである。一般的にはオコジヨ妖精を仲介人として契約を行うことが多いらしいが、あいにくといま麻帆良にオコジヨ妖精はいないようだ。ネギが候補を見つけたら、僕が仲介をしてあげようと考えている。

「いや、僕にはまだ早いんじゃないかなと思って」

ネギは何か恥ずかしいことを思い出したのか、若干顔を赤くしながら答えた。何があったのかは気になるが、おそらくあまり知られたくないことなのだろう。聞くのも意地が悪いかと思い、僕は続けた。

「本契約にはまだ早いが、パートナー候補を見つけて仮契約をするくらいならむしろ今からやっておいた方がいいぞ。一般人を巻き込むのは絶対にだめだけど。魔法を知っている生徒なら相談してみたらどうだ」

僕がそう勧めると、ネギは困った顔で答えた。

「でも僕、この学校で魔法関係の生徒とはほとんど会ったことがないんだ」

なんと。うちのクラスにも数名ほどいるじゃないか。

「まあ、そのうち出会いもあるだろうさ。焦るのはよくないが、ぼちぼちそういうことも考えておいた方がいいぞ」

苦笑しながらそう言うと、ネギは純真な笑顔で頷いた。

「うん、考えてみるよ」

僕とは比べ物にならないくらいいい子だなあ、などと感心しつつ僕はプリントの製作に戻った。先日、超が安く譲ってくれたPCはなかなか使い心地がいい。この前まで使っていたPCはプリントに写真を張り付けるだけでフリーズしかけるくらいのオンボロだったが、このPCには印刷業者が使うような専門ソフトまで入っており、しかもどれを起動してもサクサクと動く。デスクトップの壁紙が超包子の広告でロックされている以外は文句の付けどころがない。

通販で購入した資料を開き、しずな先生が淹れてくれたコーヒーに口をつけると僕はプリントの製作に没頭し始めたのだった。

その夜。時計が夜の十時を指す頃、自宅の電話機が鳴った。

「はい、スプリングフィールドです」

「デレク？ 学園長先生の課題っていうのを聞きたいんだけど……」

電話をかけてきたのはネギだった。電話の向こうから、若干の緊張が伺える。

「その前に、周りには誰もいないな？」

「うん、このかさんがさつき寝たから、部屋を抜けてきたんだ。女子寮の裏から携帯で電話してるよ」

先日購入させた携帯電話をさつき使いこなしているようだった。

「そうか、ならいいんだ。本題に入ると、学園長からの課題についてのは――」

そう言いかけた瞬間。電話の向こうからガラスの割れるような音が聞こえた。

「ネギ！ 何か起きてるんだ！？」

僕の呼び掛けにはこたえず、ネギは叫んだ。

「君は、うちのクラスのエヴァンジェリンさん！」

携帯電話を投げ捨てたのだろうか、ネギの声は小さく聞こえた。

「クソッ、停電の日を待つんじゃないのか！」

悪態をつき、僕は脱いでいたジャケットを着て転移魔法の準備を始めた。あいにく、ベルンハルトは桜咲とともに警備に回しており、高畑さんの手助けのためほかの悪魔も魔法世界に使わしている。僕の戦力は自分だけだ。書斎の机に立てかけた杖を取り、加工済みの拳銃を懷に忍ばせる。

書斎の机から麻帆良の地図を引っ張り出し、女子寮の位置を確認すると僕は転移魔法を行使した。空気中の水分を凝縮して生み出し

た水を媒介に、転移の術式を行う。

一瞬ののち、僕は女子寮の裏手に転移していた。

目の前にはマクダウエルがおり、地面に倒れて気絶しているネギを見下ろしている。用意周到なことに防音結界が張られていて、女子寮に戦闘の音が聞こえることはなさそうだ。

「ネギ、大丈夫か？」

目の前には、黒いマントを羽織った吸血鬼。弱い魔力を感じる。ネギは答えない。どうやら眠りの魔法にやられたらしく、寝息を立てている。

「ほう、さすがに貴様相手に一人では分が悪いか——茶々丸！」

吸血鬼が名前を呼ぶと、機械仕掛けの従者が姿を現した。

「もう知っているだが、茶々丸は私の従者なんだよ」

得意げに笑い、マクダウエルはマントから試験管とフラスコを取り出した。

「ああ、知っていたとも」

マクダウエルは試験管を指にはさんで言った。

「その通り。高位の術者だとはいえ、悪魔のいない召喚術士など私たちの相手ではない」

ニヤリと笑い、マクダウエルは試験管を投げた。だが、彼女は僕

の悪魔は見ていても、僕自身の術については見ていなかったようだ。あの夜、暗い森の中ではベルンハルトばかりが目立ち、水銀は見えなかったのだろう。

「あいにく、防御には自信があつてね——わが意に従え！」

僕も懷から試験管を取り出し、水銀を撒いた。

「氷結、武装解除！」

「防げ」

発動した魔法を、盾の形をとった水銀が跳ね返す。

「物理障壁……？ いや、手動の水銀による防御か。茶々丸、やれ」

水銀による自動防御にはわざわざ声を出す必要はない。が、初手で防御に合わせて声を出すとこの水銀があたかも手動式であるかのように相手は錯覚するのだ。

素早く接近してきた従者は、確かに僕が主導で水銀を操っていたのなら反応はできなかっただろう。だが、自動防御の機能を持つ水銀は自動車以上のスピードで接近する従者をしっかりと捉え——僕の前に盾として展開され、拳を防いだ。

「ちつ、自動防御か。厄介だな、ここは引くぞ、茶々丸！」

再びマクダウエルの魔法が炸裂し、水銀は僕とネギを覆うようにドーム状になり、その隙にマクダウエルとその従者はこの場から離脱したようだった。なにかジェットのようなものを噴射する音が聞

こえ、魔力が遠ざかっていく。

「ふう、明日はまた学園長に報告だな……」

地面に横になって眠るネギを見下ろして、僕はやれやれと溜息をついたのだった。

14話

気付けの魔法でネギを起こすと、彼はおびえた様子でしがみついていた。

「デレク、どうしよう。吸血鬼で歴戦の魔法使いなんて、魔力を封じられてても勝てるわけがないよ……それに僕が一人の時を狙うって言うてたし、どうしよう」

「大丈夫大丈夫、学園長先生には言っておくから。そんなことより、だから早くパートナーを選べって言ったのに」

僕がそう言っていると、近くの茂みからガサガサと音がして一匹の小動物が出てきた。

「へへっ、旦那もそう思いますかい？ やっぱ、いまの兄貴にはパートナーが必要っすよね！」

茂みから姿を現したのは一匹のオコジヨ妖精だった。タバコを加えており、親父臭い声で何やらしゃべっている。

「君は誰だ？ というかその前に、そのタバコは消してくれ。その匂いは嫌いなんだ」

「おっと、これは失礼しやした。あっしはオコジヨ妖精のカモミール、兄貴に恩を返しに来たのさ！」

オコジヨ妖精が名乗ると、僕にしがみついていたネギはぱっと明るい顔になり、嬉しそうにおこじよを抱きしめた。

「カモ君！ 懐かしいなあ、随分と大きくなったんだね」

知り合いなのだろうか。何となく邪魔をするのもためられたので、周りを見回して杖を振って認識障害の結界を張っておく。

「そんなことより兄貴、パートナーっすよパートナー！ マギステル・マギを目指すんならパートナーの一人もいなきゃかつこつきませんぜ！ それに、さっきの吸血鬼もパートナーがいれば十分に戦えるはずでさあ！」

なにやらやかましいが、おおかた協会からもらえる金が目当てなのだろう。まあ、事情があつてお金が必要なのかもしれないし、僕は拝金主義者は嫌いじゃない。

「パートナー選びはいいが、くれぐれも一般人を巻き込むなよ。そんなことになってみる、水銀飲ませるからな」

二人に釘を刺すと、二人は頷いた。

「ところでネギ、悪いニュースとさらにっ悪いニュースがあるんだけどどっちから聞きたい？」

もちろん、一時的に寮を出なければいけない件と対エヴァの時間稼ぎの件だ。

僕の言葉を聞いたネギはあからさまにおびえた顔をしたが、震える声で何とか答えた。

「じゃ、じゃあさらに悪い方で」

なるほど、母は残しておくタイプか。

「残念なことに、学園長からの課題は魔力の戻ったマクダウェルと戦うことなんだ。僕もサポートにつくけど、しっかりと戦ってくれたまえ。来週の火曜日の午後八時、場所は麻帆良大橋だ」

「そ、そんな！ 無理だよ、僕はまだパートナーもいないんだし――」

「パートナーが見つければ3対1だし、僕もその時はちゃんと準備するからね。とりあえず、パートナー探しを急いだ方がいいと思うな」

僕がそう言うのと、カモミールとやはは大きくうなづいた。

「じゃあ、悪いニュース。明日から課題が終わるまで、ネギは僕の家泊まってるね」

僕がそう告げると、ネギはあまり動揺しなかった。近衛君や神楽逆君にはなついていようだったから、なかなか意外だ。

「うん、アスナさんたちに迷惑をかけるわけにはいかないもんね」

どうやら、自分の置かれた状況は理解してはいるようだ。さすがに10歳で教師になるだけあって、賢い。

「じゃあ、明日の授業が終わったら僕の家に来ること。僕は所用でいないかもしれないから……そうだな、桜咲君に案内してもらった方がいい。彼女には僕から話しておくから」

そう言っただけで家の鍵を取り出し、ネギに渡す。僕は転移魔法で家に入ることができるので、鍵を持つ意味はないのだ。

「桜咲さんって確か3-Aの子だよな？ 仲いいの？」

僕の言葉に、ネギは不思議そうに首をかしげて言った。

「いや、彼女も魔法関係者さ。といっても魔法使いではなくて剣士だけだね」

僕が答えると、ネギは驚いたようだった。

「へえ、桜咲さんも関係者だったのかあ……」

懐から名簿を取り出し、何やら書き込むネギ。ネギの肩に乗って名簿を眺めたカモミールは、いいことを思いついたという風にネギにささやいた。

「兄貴、この桜咲って姉さんにパートナーの件頼んでみたらどうですか？ 魔法使いの兄貴とは相性もいいでしょうし、なかなか頼もしそうな面構えですぜ」

「うーん、桜咲さんかあ……まだあんまりお話したことないんだよねあ……」

3-Aの中で僕の家を知っている生徒は超と桜咲君だけだ。超はネギとの相性はあまり良くないだろうし、桜咲は無口だが頼りになる。家への案内くらいならやってくれるだろう。ベルンハルトに任せてもいいが、桜咲君がネギのパートナーを引き受けてくれる可

能性がある以上は彼女に任せた方がいいか。

「じゃ、僕はそろそろ帰るから。何度も言っけど、絶対に一般人は巻き込まないように」

「わかったよ、デレク。今日はありがとね」

幸い、認識阻害結界はまだ作動中だ。僕は例によって転移魔法を行使し、自宅へと戻った。

マクダウェルとの戦闘の翌日、僕はまたしても学園長室にいた。

「それで学園長、どうしますか？　今回襲われたのは生徒ではありませんから僕としてはどちらかといえばどうでもいいんですが、魔法先生たちは黙っていないでしょう。もう昨夜の件は漏れているようですし、そろそろガンドルフィーニさんあたりがここに来てもおかしいですよ」

昨日よりさらに憂鬱そうな顔をした学園長は、溜息をつくと答えた。

「デレク君をネギ君の護衛ということにする。手間をかけてすまん

が、例の侯爵をネギ君につけておいてくれんかのう？」

「それくらいなら。ですが、マクダウエルに何らかの処分を下さないと一部の先生は暴走しますよ」

「じゃが、彼女は呪いのせいで家に閉じ込めるわけにもいかないしのう……あまりこういうことはしたくないのじゃが、今回は学園長権限を使うしかないじゃろうな」

つまり、権力で強引に不満を押し殺すということだろうか。悪手だが、現状では仕方ないかもしれない。

「わかりました。とりあえずネギは僕の家に来ることになったので、停電の日まで襲撃はないと思いますが……」

「迷惑をかけるのう」

すまなさそうに詫びる学園長に、答える。

「いえいえ、もとはといえば叔父が原因ですから」

実際にはそんなこと思っちゃいないが、社交辞令というやつである。まあ学園長は基本的にいい人だし、教育者としても尊敬できる人間だ。僕の主義のせいでいらぬ苦勞を掛けて少しくらいは後ろめたいと思っている。

学園長室を辞去し、職員室へと向かう。今日は一時間目の授業は入っていないので、コーヒーを飲みながら新聞を読む。

3紙目を読み終わったところ、ちょうど一時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。二時間目の授業で配るプリントを用意し、板書の内容をチェックしていると職員室に桜咲がやってきた。何かを探すかのようにきよろきよろしたかと思うと、僕の方へと向かってくる。

「桜咲か。どうした」

小声で認識阻害を発動させ、小走りで向かってきた桜咲に問いかける。

「先生、ネギ先生の護衛には先生がつくのではなかったのですか。私をパートナーになどいきなり言われても、困ります」

何を言っているのやら。

「とりあえず、最初から説明してくれ」

どうやら彼女は少し興奮しているようで、目が吊り上っているように見えた。

「失礼しました。先ほどネギ先生から、今日デレク先生の家まで連れて行ってほしいといわれたのが発端でした。デレク先生が忙しいということを聞いたので承諾したのですが、その後いきなりネギ先生が『パートナーになってほしい』などと言いはじめたので、戸惑っているのです。いったいどういうことですか？」

ネギも精神的には成長したと思っていたのだが、どうやら交渉ごととはまだまだ未熟なようだ。

「ああ、諸事情でネギがマクダウェルに狙われているのは知ってるよね？ 今度の火曜日に戦うことになりそうだから、従者が欲しいんだろう」

そう勧めたのは僕だけど、と内心で付け加える。桜咲君の事情についてはだいたい把握できてるから、そういう偏見のないネギと組ませればコンプレックスの解消にも役立つかと思ったのだが、どうやら僕の目論見はうまくいっていないらしい。

「なぜ私なんですか？ だいたい、私にはお嬢様の護衛という大切な――」

「近衛君は関係ないだろう。だいたい、真剣に護衛をしたいなら彼女の近くで友人としてふるまった方が得策だろう」

桜咲君の言葉をさえぎって言うと、彼女はいよいよ顔を赤く染め、表情を陰しくした。

「――事情があるんです、私にも」

「そのくらいはわかるさ、僕は召喚術士だ。人ならざる者の生態については詳しいよ、少なくとも一目見ればわかるくらいには」

何を、とは言わない。言わなくても察するだろう、という自信はある。

「先生は――」

「悪いけど、悩み相談は受け付けないよ。自分で答えを出してからなら話は聞くけど、僕は君と違うんだ。君の気持ちを汲み取ること

はできない」

再び彼女の言葉を遮る。非情なようだが、教師というのは自分で考えないで答えを聞きにくるような生徒には厳しく対応するものだと思うっている。

僕は最近、自分のことを魔法使いである以前に教師であると自認するようになってきている。新田先生をはじめとする素晴らしい先生方と接してきて、教員のやりがいなどを実感できるようになってきたのだ。教えるのも楽しいし、戦場で人助けをするよりよほど性に合っている。新田先生曰く、教員は昔の教え子と酒を飲めるようになってからが一人前だそうだが、新田先生のところにはしょっちゅう卒業生がやってきては飲みに誘っているのだ、よほど慕われているのだなあとうらやましい限りだ。僕も将来はああいう風な生徒に慕われる先生になりたい、と考えている。

さて。

「話をもどそうか。ネギのパートナーの件なら、本契約ではなく仮契約だから安心してくれていい。マクダウェルと戦いたくないならば引き受けてくれないいいし、戦うことに異議がないならパートナーになってやってくれ。近衛君の安全については僕と学園長が保証しよう」

一気にたたみかけられて困惑している桜咲君をそのままに、僕は教材を持って立ちあがった。

「じゃ、僕は授業があるから。パートナーの件は月曜までに決めてくれればいいよ」

「えっ、ちょ——」

慌てふためく桜咲君をスルーし、教室へと向かったのだった。

15話

「ですから、封印結界の復旧にかかる時間はおよそ五分ほどです。あらかじめプログラムを用意しておけば従来より二分ほど早く復旧できる見通しですね」

麻帆良の電子的な防衛システムの責任者を務めているという男と話し始めてから、かれこれ三時間程が経った。検討しなければならぬことはほとんど検討し終わったはずだ。

目の前の男は気の抜けたあくびをした。僕もそろそろ疲れてきている。この辺でお暇するべきだろう。

「なるほど、ありがとうございます。それでは、当日はよろしくお願いします」

「ああ、復旧までは何とか抑えておいてくれよ。こっちもなるべく早く復旧できるようにするから」

それでは失礼しました、と頭を下げて部屋を出る。モニターと電子機器がたくさん並んだこの空間は、なんだか僕には居心地がよい。ない。

時刻は午後八時。ネギは家に着いているだろうが、まだ何も食べていないかもしれない。料理も買い物も面倒くさいから、超包子のお持ち帰りメニューでも買うか。あそこは割り引きしてくれるし、何より肉まんが絶品だ。

大停電、つまりマクダウェルとの戦闘まではあと5日。だいたい

の準備は終わり、あとは時間稼ぎを成功させるだけだ。マジックアイテムの類もかなりの数を用意したし、準備はほとんど終わっている。ネギのパートナーに関しては「契約が成功すればいいな」程度に考えていて、もともと戦力としては計算していない。

工学部のキャンパスから出て、超包子へと向かった。

屋台にはまだ客が入っており、絡繰君と葉加瀬君が忙しそうに接客をしている。弁当販売の窓口も混んでいるようなので、並ぶのが面倒臭くなった僕はコンビニで適当に何かを買おうと思い、屋台を後にした。

だが。

監視カメラでもついていたのか、僕が最寄りのコンビニに向かっているのを見ると背後から声をかけられた。もちろん、声の主は超だ。

「先生、お持ち帰り用の炒飯と肉まんネ。レンジで温めればおいしく食べられるネ、安くしとくヨ」

「ああ、ありがとう」

懐から千円札を取出し、超に渡す。超はいつもの通りニコニコと笑いながら紙幣を受け取り、おつりを出そうとした。

「いや、面倒だからおつりはいいや。小銭が増えると面倒くさい」

「おお、太っ腹ネ。ところで先生、一つ頼みたいことがあるんだが、

構わない力？」

弁当を受け取り、答える。

「内容によるな」

「少し、職人としての先生の技術を貸してほしいアル。工学部で作った試作ロボットにルーンを刻んでみてほしいのだ」

ふむ、と考え込む。

「報酬とノルマは？」

「人間大のロボット50体に物理的・魔法的な攻撃を緩和する加工をお願いしたい。報酬は、300万円、前金で半分渡すヨ」

超はニコニコと笑いながら指を三本立てた。

「わかった、引き受けよう。納期はいつだ？」

「学園祭最終日までに仕上げてくれればいいネ」

学園祭最終日、か。余裕だな。

「仕事場は用意してくれるのか？ 作業開始は？」

「私の研究室を貸すヨ。明日から来てくれていいアル」

これは地図ネ、と超君はポケットから工学部内の地図を取り出して僕に手渡した。

ちよろい仕事だ。それじゃあ、といって超と別れた僕は、いつもより上機嫌で自宅へと帰った。

家に帰ると、案の定ネギは名にも食べてなかったようだ。炒飯を温めて食べさせ、僕は肉まんを頬張った。今夜は警備があるが、僕はもともと小食な性質だ。問題はない。

ネギには使ってなかった一室をあてがった。僕はいったん風呂に入ってかつら、書斎で本を開く。『日本の異形——その生態と社会』という、なかなか興味深い本だ。著者が出版後に惨殺されたことも併せると、ますます興味をそえられる本である。

警備のシフトは11時からだ、まだ時間はある。そう思いながら本をめくっていると、書斎のドアがノックされた。

「入っていいよ」

入ってきたのはネギだった。肩にはカモミールを乗せており、なにやら悩むような顔をしてる。

「どうした、枕を変えてほしいのか？」

もちろん、そんな要件でないことは理解していた。だが、ネギの生真面目さや今の深刻な表情を見ると、また面倒くさいことを話してきたのかもしれないと思うのも仕方ないだろう。適当にごまかしたかったが、しかしネギはそれを許さなかった。

「ううん、違うんだ……パートナーのこと、桜咲さんに断られちゃったんだよ」

まあ、予想通りではある。もともと桜咲は孤高を持って良しとする人間のようなだし、いきなり仮契約など持ち出されても断るだろう。彼女はそういう人間だ。純粋な人間ではないが。

「まあ、そんなこともあるさ。大丈夫、パートナーがいなくても何とかなるさ」

僕は明るい口調でそう言って話を打ち切ろうとしたが、ネギはまだ部屋に居座る気だったようだ。

「ねえ、デレク。なんで僕じゃだめなのかな？」

「付き合いが浅いからだろ」

即答すると、ネギはふるふると首を横に振った。いつもにもまして頼りなさげな様子だ。

「違うんだよ、桜咲さんはこう言ったんだ。『デレク先生ならあるいはいいかもしれませんが、ネギ先生とは仮契約はできません』って。それが僕には納得できないんだ」

静かに、だが強い感情をこらえるかのような口調。少し刺激すれば今にも泣きだしそうな、そんな顔をしている。僕は正直に言っても面倒くさかったが、この子は優等生なようできて実はかなり頑固だ。強引に追い出したところで、扉の外で一晩中待っているに違いない。

「あのね、僕は父さんみたいなマギステル・マギになることを目指して、勉強もそれなりに頑張ってきたと思う……だけど、魔法学校を卒業する時の成績もデレクには敵わなかったし。僕は、デレクも尊敬できる人だと最近までは思ってたんだ」

「まるで今は尊敬してないみたいな口ぶりだな」

「うん、僕はデレクを尊敬する気にはならない」

まっすぐ目を見て、ネギは言った。

「タカミチが教えてくれたんだ。デレクは村の人たちを救ったけど、それはたまたま自分の知ってる人たちだったからだって……もともと、マギステル・マギになる気もないんでしょ？ その気になればマギステル・マギとして認められるだけのことはできるのに、なんでそうしないのが、僕にはわからないんだ」

確か、前にも超と同じような話をした気がする。

「魔法使いの力は困っている人たちを助けるためにあるはずでしょ？ 僕なんかよりずっと強くて頭もいいのに、なんでデレクはこんなところにいるの？」

言葉は冷静なようだが、表情からは激情が伺える。僕は溜息をつ

いて言い返した。

「君は教師を馬鹿にしてるのか？ 教師という職業はマギステル・マギに劣ると、そういうことか？」

ネギは黙り込む。

子供の綺麗ごとだとは分かっていても、教職を馬鹿にされれば黙ってはられない。いらだちを感じ始めた僕は、少しきつい口調で続けた。

「僕は僕のやりたいように生きる。そもそも、僕はマギステル・マギが必ずしも正しいとは思っていない」

息をついてから、続けた。

「たとえば先日、アフリカで某独裁者が殺されたよな？ あれに魔法使いがかかわってて、実際に手を下したのがあるマギステル・マギだってことは知ってるか？」

僕が聞くと、ネギはいぶかしげな眼で頷いた。

「あの独裁者、日本では圧政を敷いた極悪人だとして報道されていなかったけど…… 実際には植民地時代からアフリカ諸国の独立運動を展開していた男で、アフリカの国々で団結してEUのような連合を作ろうという運動を展開していた。知ってるか、現地の住民の半分以上はあの男を英雄だと思って心酔してるんだ。日本ではそれが報道規制による洗脳だといわれていたけど、実際はどうなんだろうね。つまり何が言いたいかというと、魔法使いのやっていることが必ずしも正しいことだとは限らない、ということだ」

最近仕入れた知識を披露すると、ネギは反論してきた。

「でも！ それなら人を殺すことじゃなくて、人を助けることをすればいいだけじゃないか！ デレクの悪魔は解呪もできるんでしょ、それを使えば――」

「いい加減にしろよ」

うんざりした僕は、ネギの言葉をさえぎって言った。

「確かに魔法使いの活動はほとんどが貴いものだと思うし、ごく一部の怪しげで過激な活動を除いてはおおむね善いことをやってるんだとは思うよ。だけど、それは僕がマギステル・マギを目指す理由にはならない。僕は僕の生きたいように生きる。なぜなら、僕がそう望むからだ」

強く言い切って、さらに続けた。

「僕は自分の周りで困っている人がいれば助けるさ、だけどそれまでだ。地球の裏側で子供が餓死しようとも、僕には関係ない。力があるからなんだっていうんだ？ 力があるから人助けをしなきゃいけないっていうのはどういう理屈なんだ？」

僕が早口でそう言うと、ネギはやはり反抗的に睨んできた。

「困ってる人がいれば、助けるのは当然じゃないか」

「なら、力を持つ人間は自分の生き方を自分で決める自由がないのか？ 自分の生き方を自分で決めるのは当然のことだ、他人が指図

するのは違つたらう」

僕がそう言うと、ネギは唇をかんだ。ネギのその正義感はかけがえないものだと思うし、彼は順当に成長すれば魔法界を代表するマジステル・マギになるだろう。だが、だからと言って他人に善行を強制する権利など持っていない。そんなことは誰にも許されるべきではない。

携帯電話が鳴った。どうやら、もう警備の時間ようだ。

「まあ、マクダウエルと戦うまでにまだ時間はあるんだ。そういう哲学的なことを考えてみるのも悪くはないだらう。僕は出かけてくる」

ネギには警備のことは話していない。深く悩むような、苦しげな顔をしたネギを置いて僕は外へ出た。

16話

集合場所に向かうと、そこにはすでに桜咲君がいた。

「先生。ネギ先生のパートナーの件ですが、やはりお断りさせていただきますことにしました」

開口一番、桜咲君はそう言った。

ベルンハルトは霊体化して僕らの後をついてきている。

「まあ、そうだろうな」

「ネギ先生とはそれほど親しくありませんし」

そう言ったあと、桜咲君は続けた。一見無表情だが、その眼は朝と同じような迷いを抱えているように見える。

「先生。私はやはり、お嬢様の護衛としてはふさわしくないのです
ようか？」

「自分ではどう思うんだ？」

質問に質問を返すと、桜咲君はやや迷ってから答えた。

「私自身は、やはり私のようなモノはお嬢様の護衛にはふさわしく
ないと考えます。私より手練れの剣士はいますし、なにより私のよ
うな半人間が護衛というのでは対外的にも聞こえが悪いでしょうし」

なるほど、彼女はそう考えるのか。

「僕個人としては、そうだね。君は護衛としては失格だろうな。半人間うんぬん以前に、護衛対象と距離を取っていても十分な護衛ができるほどの腕ではないだろう。だいたい、ふつうは護衛なんて複数人でやるもんだ。ただでさえ未熟なのに、一人で任務を完遂できるわけがない」

言い切ると、桜咲君は落ち込んだようだった。

「……そうですね。やはり、私は相応しくないようです」

「だいたいさ。君はいつも近衛君のことばかり気にしてるけど、君自身はどうなんだ？」

夜の森を歩きながら、桜咲君に問いかける。

「どついうことですか？」

「君自身は将来の夢とかやりたいこととか、そういうことはないの？ 今のまま近衛君の護衛を続けても、いつか彼女は死ぬわけだし」

僕がさらりと言うと、彼女は顔を険しくして詰め寄ってきた。

「お嬢様が死ぬとはどついうことです！」

「だって君、ハーフだろ？ 何と人間のハーフなのかは知らないけどさ、だいたい人間と契るような格の高い人外は500年くらいの寿命があるわけだ。単純に計算すると、500+80を2で割って290年くらいの寿命があることになる。近衛君が天寿を全うした

後、君はどうするんだ？」

「どうやら、桜咲君はその問題について何も考えていなかったらしい。」

「あつ……」

桜咲君は気の抜けた声を漏らすと、そうか、という顔になった。

「教師としてアドバイスさせてもらうと、たぶん君は寿命とかの関係で表に生きるのは難しいだろう、不自然すぎるからな。剣術家を目指すとか、自分の目標を持って見たらどうだ？ 近衛君の護衛の件は置いておくとして、とりあえず自分のやりたいことを見つけておかないと下手したらリストラされて路頭に迷うぞ。このご時世、裏の世界もちゃんとした職業は就職難だからな」

ベルンハルトが悪魔を発見したらしい。僕がベルンハルトを行かせた直後、桜咲君はつぶやいた。

「やりたいこと、ですか……」

「そう。今の君には近衛君の護衛しかないだろう？ でも、護衛も十分に果たせるとは言い難い。なら、いつそのこと護衛をやめて自分の生き方を見つめなおしてみたらどうだ？」

そう、いまの桜咲には彼女自身がない。朝起きる時間すら近衛の警備に都合がいいように調節し、勉強よりも護衛を優先する。趣味らしきものもないようで、僕からすればあまりにも近衛君を大事にしすぎている。二人はそう親しいわけでもなさそうだが、桜咲君が近衛君の護衛にかける情熱は常軌を逸している。

「私の生き方……」

僕の言葉に、桜咲君は深く考え込み始めた。

森の中には、僕たちの足音しか聞こえない。遠くで赤い光がちらつく。ベルンハルトの剣だろうか。

「……私には、私を拾ってくれた西の長への恩があります。恩を返すべくお嬢様の護衛をしていたのですが……」

迷いを抱えた目で、桜咲くんはそう言った。僕は首を横に振り、その言葉を否定する。

「恩返しの方法なんて何通りもあるだろう。それに、君はいささか受け身に物事を考えすぎる。もう少し積極的になったらどうだ。こう、『すべきだ』みたいな考えに凝り固まるのはよくないよ。何をするべきかじゃなくて、何をしたいのかを考えてみればどうだ」

それっきり、言葉は途絶えた。僕も桜咲君も黙り込み、森を歩く。

今日は敵の侵入がほとんどない。ベルンハルトに処理させた最初の一件以来、5時間が経っても敵は来なかった。

一晩中森を歩き回り、時刻は午前四時になっていた。ずっと沈黙したまま歩いていたせいか、時間が異様に長く感じられた。

「……やはり、いまの私には結論を出せそうにありません」

警備が終わり交代を済ませた後、桜咲君はぽつりと呟いた。

「悩んでるところ悪いがな、ついでに近衛との関係にも決着をつけることを勧める。何があつたかは知らないけど、何かあつたことは確かなんだろう？ それと僕だけじゃなくて、誰かほかの人間にも相談してみたらどうだ？ たとえば、同室の……」

同室の、とまでは言いかけたがよく考えてみれば桜咲君の同室者は知らなかった。

「龍宮ですか。なるほど、彼女なら人生経験も豊富そうだ。龍宮にも相談してみることになります。ありがとうございました、先生。お嬢様との関係についても見直してみます」

同室は龍宮君だったのか。裏の者同士、それなりに信頼を置いているらしい。桜咲君は龍宮君にも相談することに決めたようだった。

「まあ、進路相談も教師の仕事だし。答えが出たら、よければ聞かせてくれるかな」

「ええ、もちろん。少なくとも護衛の件については思い切りがつきましたし、今度の修学旅行の際に本山に立ち寄ろうと思います」

そう言う桜咲君の横顔は、なにやら少しだけ晴れやかだった。

「別行動か？ 正座決定だな、桜咲」

軽口を言つと、桜咲は少しだけ微笑みを漏らした。

「では、私はこれで」

「ああ、遅刻するなよ」

挨拶を交わして、僕たちは女子寮前で別れたのだった。

その日、授業が終わると僕は超の研究室へと向かい、依頼された作業を進めた。田中さんと呼ばれるロボットにルーンを施すだけの簡単なお仕事で、もとの戦闘力とルーンによる物理・魔法障壁が合わさってかなり強くなった。いろいろと話し込みながら作業を進めているうちにかなり時間が経っており、気が付けば日付が変わっていた。

「それじゃ、今日は帰らせてもらっよ」

出された中国茶を飲み干すと、僕は道具一式をカバンにしまって立ち上がった。

研究室の片隅では葉加瀬君が寝ており、起きているのは僕と超だけだ。超は麻帆良の地図に印をつけて何やら書き込んでおり、難しい顔をしている。

「気を付けて帰るネ」

地図を睨み付けたまま、超はそう言った。よほど集中しているらしく、先ほどから瞬きをしていない。

「君も無理するなよ」

聞こえているのかいないのかわからないが、ともかくそう声をかける。案の定返事はなかったが、僕は気にせずに研究室から出た。

ネギには適当に外食するように言いつけてある。僕も超たちと一緒に夕食を済ませていたので、今夜は特に何も買わなくていい。

さいわい、周囲に人気はない。僕は転移魔法を使って家に帰り、玄関で靴を脱いでから寝室へと向かった。

家に明かりはついていない。たぶん、ネギはもう寝たのだろう。よく見てみれば風呂を使った形跡がない。あいつめ、風呂嫌いはまだ治ってなかったのか。

ちよつとした魔法で水流を操って浴槽を洗うと、僕はボタンを押して湯船を張りはじめた。魔法で風呂をわかすのは湯加減が難しいから嫌いなのだ。

昨日は警備のため眠れなかった。リビングのソファで襲いくる眠気と戦っていると、コーヒーターブルの上に何か白い物体が鎮座しているのが見えた。カモミールだ。いつからいたのだろうか。

「ところで旦那、旦那はパートナーはいらないんですかい？」

「………いらないよ、そんな面倒くさい」

このままでは眠ってしまいそうだと判断し、風呂が沸くまでの間カモミールと雑談をすることにした。

「いやいや、エヴァンジェリンとの戦いにはいた方がいいでしょうぜ。仮契約ならすぐに解除できやし、ここはひとつお試しってことで」

一理ある。しかし。

「そもそも、契約する相手がいないじゃないか」

これに尽きる。

「何を言ってるんです、桜咲の姐さんならけるんじゃないっすか？」

「仮契約とはいえ、パートナーはそう簡単に決めるものじゃないだろう。今の若いのは簡単に仮契約しすぎだ」

「うわっ、おっさん臭いこと言うッスねえ」

カモミールは煙草を取り出したが、それを取り上げて答えた。

「それに、戦力目当てで契約を持ちかけるのって相手を馬鹿にしすぎじゃないか？ パートナーとして契約を持ちかけてついでに戦力強化も、というならいいんだけど。純粹に戦力強化のために契約するのは何か違う気がする」

まあ僕の私見だけだね、と付け加える。

契約とはいっても、人間とのパートナー契約と悪魔との契約はだいぶ異なる。用いられる術式も結構違うし、悪魔との契約は単純に

戦力を確保するための手段だ。

「しかし、旦那……」

「くどいぞ。風呂も沸くころだし、この話はこれまでだ」

なおも食い下がるカモミールの言葉を遮り、僕は風呂へと向かったのだった。

17話

大停電の日の夜。僕とネギ、ベルンハルトは麻帆良大橋の上で佇んでいた。

結局、桜咲君の協力は得られなかった。彼女は彼女自身の問題に取り組み始めたようで、ここ最近は毎日眉間にしわを寄せて難しい顔をしている。そうやって悩みすぎるのも彼女の悪い癖だとは思いますが、真剣に考え込んでいるのを見ると口をはさむのも悪い気がして、結局ここ2・3日はあまり話していない。

ネギとはここ数日、あまり口をきいていない。先日の論争が尾を引いているのかどうかはわからないが、僕は朝早く家を出て夜遅くに帰宅するのでネギと接する時間がほとんどなかったのだ。彼もまた何やら悩んでいるようで、僕はこんな様子で大丈夫なのかと内心不安に感じている。

時刻は停電の5分前。油断してマクダウェルが時間前に姿を現すようなら都合がよかったのだが、どうにもそううまくはいかないらしい。

乱戦が予想されるし、僕のお粗末な腕ではフレンドリー・ファイアをやらしかねないので重火器の類は持参していない。そもそも障壁の展開には杖が必要だし、僕の杖はネギのそれと同じくらい大きい。もとより、銃を使えるはずもなかったのだ。

春だというのにどこか薄ら寒い空気だ。手を保護するための手袋をつけ、僕はマクダウェルの襲撃に備えた。

本当なら、ベルンハルトとその他の上級悪魔に任せて自分は家に引きこもっていたい。だが、マクダウエルも一応は僕の生徒だ。結末を見届ける責任はある。

ひゅー、と風が吹いた。生暖かい風が頬を撫でるとともに、街の明かりは消え——街灯の明かりが消えた。辺りが闇に包まれる。

「ライト、オン」

僕が手を打ち鳴らすと、橋の各所に仕掛けられていたマジックアイテムが明かりをともし、橋をライトアップした。橋の周辺には認識障害の結界が張ってあるので一般生徒に目撃される恐れはない。

魔法先生たちは今頃、侵入してくる外敵を片端から撃破しにかかったはずだ。助力は期待できない。

明かりがつくとともに、西の方角に巨大な魔力が出現したのが感じられた。ベルンハルトが鞘から剣を抜きはらい、ネギは杖を構える。

僕は懐から取り出した試験管を傾け、水銀を取り出した。30リットルもの水銀を惜しみなく使い、僕を囲むように配置する。

ぞわり、と嫌な感覚が全身を這う。空気中の魔力が嫌な感じに歪み、マジックアイテムの明かりによってできた影が変質し——そして、マクダウエルが姿を現した。ネギの体が目に見えて強張り、ベルンハルトは静かに目を細める。僕は水銀をより一層密集させ、攻撃魔法に備えた。

「こんばんは、先生たち……パートナーもなしに私と戦う気か？」

冷徹な碧眼が向けられただけで、僕の体はピクリと反応した。濁流がぶつかってくるような、不可視の圧力を感じる。僕は思わず、一歩後退して障壁をもう一枚重ねて展開した。

喉がカラカラに乾く。ドラゴンと戦ったことはあったが、あれはどちらかと言えば戦いを遠くから見ただけで、ドラゴンの殺気を感じることはなかった。だが、今回は違う。真祖の吸血鬼に一睨みされただけで、早くも僕は逃げ出さなくなっていた。

それでも目をそらさず、全身から声を絞り出すようにしてマクダウェルに尋ねた。

「自首するなら、処分は軽くするぞ？」

馬鹿げた一言だとは分かっている。だが、教師としては聞いておきたかった。

「……私を愚弄するのか？ ならばいいだろう、従者はいまだ到着しないが先に貴様を血祭りにあげてやるう」

すつ、と彼女の目が細まる。瞬間、魔法の発動を感じ取った水銀が僕の前に展開された。

「魔法の射手・連弾、氷の37矢！」

氷の魔弾が飛翔する。直接視ることは叶わないが、魔弾に込められた常軌を逸した魔力は全身を感じ取っている。

「ベルンハルト！」

もつとも信頼する悪魔の名前を呼び、魔法詠唱の直後で隙ができたマクダウエルを攻撃させる。だが敵もさるもので、鋭く風を切つて繰り出された刺突は魔法障壁によって逸らされた。レイピアはマクダウエルの手の甲に掠つただけで弾かれ、ベルンハルトは素早くその場から離脱する。

次の瞬間、生命力を吸い取られたマクダウエルの右腕が塵となつて崩れ落ちた。

「ほう、マジックアイテムの中でも極上の部類に入るな——だが、甘い」

マクダウエルが呟くと、彼女の右肩から大量の蝙蝠が出現し——右腕は再生した。

「魔法の射手・連弾、光の29矢！」

再生後の隙を突き、ネギの魔法がマクダウエルを襲つ。尋常ならざる魔力量のネギが放つた魔法だ、たとえ真祖とて食らえばダメージを受けるはず——。

そう考えた刹那、僕は自分の考えが甘かったことを思い知らされた。マクダウエルの展開した多重障壁の前にネギの魔法は散り、マクダウエルは得意げに笑つて見せた。

瞬間、ベルンハルトのレイピアが背後からマクダウエルを襲つ。しかし、マクダウエルの手から噴出したモノ——魔力による剣がそれを阻み、押し返した。

臂力ではマクダウエルが勝っており、剣術ではベルンハルトが勝る。二人はほとんど目に見えない速さで剣を打ち合いはじめ、僕やネギでは割って入ることのできない空間を作り始めた。

「茶々丸！」

ベルンハルトに蹴りを食らわせたマクダウエルが叫んだ。その瞬間、転移魔法によって背後からベルンハルトが襲いかかるが、彼女は魔力の剣でレイピアを受け止める。

「了解しました、マスター」

僕が振り向くのと機械仕掛けの従者が拳を放ってくるのは、ほぼ同時だった。

金属と金属がぶつかり合う音がした。水銀が壁を作り、彼女の拳を阻んだのだ。

「魔法の射手・連弾、光の19矢！」

素早く飛び下がった彼女に、ネギの魔法が襲いかかる。だが、空中でジェットのようなものを噴射した彼女は難なく魔法を避けてネギに向かっていった。

——マズい。

呪文詠唱の後で、ネギには大きな隙ができている。あのまま拳を打ち込まれれば、一撃で障壁を破られるだろう。

「魔法の射手、連弾、水の——」

杖を取って慣れない攻撃魔法を唱えかけたその時。

水銀が突然僕の視界を覆いつくし、僕を守るかのように球体になった。

「なに！？」

ベルンハルトは追い込まれてはいるものの、まだマクダウェルと戦っている。おかしい、マクダウェルの従者は絡繰君だけだったはず。一体、何が――。

呪文詠唱を中断すると同時に、水銀に金属が打ち付けられる鋭い音が立て続けに3度、響いた。

「ケケケ、面白い術式ジャネエカ」

水銀の外から聞こえたのは、まるで人形のようなぎこちない声。

――なるほど、人形遣いだったか。

彼女の二つ名を思い出し、唇を噛む。この状況は非常にマズい。

ベルンハルトはいまやいつマクダウェルの攻撃が当たってもおかしくはない。マクダウェルは手加減しているらしいが、ベルンハルトは贅力に押されて腕がしびれ始めているようだ。

ネギもおそらく、今頃は絡繰君にやられているだろう。魔法使いとしての実力はともかく、懷に飛びこまれて対処できるほどの戦闘経験は彼にはない。

僕は論外だ。こうして人形の攻撃を防いでいるものの、マウダウ

エルがベルンハルトを倒せばすぐにでも水銀の防御は破られる。攻撃魔法は不得手だし、通じるとは思えない。

腕時計を確認すると、残り時間は2分50秒。持ちこたえるには長すぎる時間だ。

どうする、と己に問いかける。転移魔法で離脱できるだけの魔力はある、が。

吸血鬼は呪いを解くと言っていた。おそらく、それほどまでに強力な呪いを解くためにはネギの血を吸い尽くす必要があるだろう。つまり、僕が逃げればネギは死ぬ。ベルンハルトがしたがつのは僕だ、僕が逃げるとなればネギを躊躇なく見捨てるだろう——そして、逃げるのならベルンハルトは連れて行きたい。マクダウェルらの追撃を一人でさばける自信はないのだ。

どうするか。嫌な汗が首筋を伝い、回答を強要するかのように金属が打ち付けられる音がする。

従者と人形に対しては水銀は鉄壁の防御力を誇る。今度は前方からだけでなく後方からも金属音が響き、僕はネギが絡繰君の拳に倒れたことを知った。かなり吹き飛んだようで、僕のはるか後方で鈍い音がした。

「クソッ、ならば——」

戦おう。

勝算はない。だが、非行に奔る生徒を止めるのは教師の職務だ。そう決意すると、全身に魔力が沸き立つのを感じた。心臓の鼓動に合わせて、自身の魔力が高まっていくのを感じる。

「水銀よ、その猛威を振るえ——」

杖から魔力を流し、水銀に注ぎ込む。注入した魔力によって一時的に水銀の質量を大幅に増やすと、僕は水銀からいくつもの腕を伸ばして周囲に振るった。

水銀の動きはそれほど速くないが、太さと本数は尋常でない。

「ケケケ、コリヤ面白イゼ」

人形が嗤い、従者と人形の気配が僕から離れる。

水銀の防御を解き、僕は杖を振るってすべての水銀を攻撃にあてた。さらに本数を増やした水銀の鞭が周囲に叩きつけられ、橋が揺れる。水銀の腕はすべて手動、もはや本能のままにめちやくちやに動かしているだけだ。素人が暴れているだけだが、直径１メートルはあるうかという水銀の鞭が20本以上も荒れ狂っているのだ。人形と絡繰君は下手に手出しをすると危険だと悟ったのか、一旦後方へと離脱したようだった。

——これならば、時間を稼ぐことはできるか。

残り時間は2分10秒。油断した瞬間、僕は熱した鉄板に水を注いだような、嫌な音を聞いた。

「ベルンハルト！」

彼はどうやら、マクダエルの魔力剣に左腕を切り裂かれたようだ。左肩からどくどくと液体が流れ出し、端正な顔を苦痛にゆがめて膝をついている。

「ククク、お前の悪魔はどうやら私には敵わなかったようだな。さて、どうするんだデレク先生？」

ニヤリ、とマクダウエルは笑った。吸血鬼特有の尖った犬歯がちらりとのぞき、悪寒を覚える。

「安心しろ、貴様の命までは取らん、その悪魔が暴れるからな」

契約したものが死んだ場合、悪魔は契約から解き放たれる。だが、契約した術士が他殺された場合——悪魔が現界しているならば、下手人を打たねばならないのだ。全力を持って。

マクダウエルも、全力のベルンハルトと戦うことは避けたいらしい。だが、僕が倒れればネギは死ぬことになる。

「当たれっ——！」

20本以上の水銀の鞭をマクダウエルに振るう。が、懷に絡繰君が飛び込んできた。目前に迫る、金属の拳。

僕はとっさに障壁を張り、杖を前に掲げた。しかし急造の障壁は脆く、絡繰君の拳はいともたやすく障壁を貫通した。

ふいに、足元の地面の感覚が消えた。それとともに、腹に衝撃が走る。一瞬の浮遊感ののち、僕は背中から地面に叩きつけられた。

「ぐっ、おえっ——」

息が詰まる。空気を吸おうとしても、胸が苦しくて何も吸い込めない。

四肢はしびれ、体の感覚はない。それほど手ひどい攻撃ではなかったが、戦闘慣れしていない僕にとっては行動不能になるくらい重大なダメージだ。

「では、眠れ……リク・ラクラ・ラックライラック！ 来たれ地の精、花の精！ 夢誘う花撒いて——」

人体に被害を与えず、直接意識を奪う類の魔法だ。僕は口の中で悪態をつき、魔力の糸を伸ばして水銀をかき集めはじめた。

17話（後書き）

次話でエヴァンジェリン編は終結します。

18話

水銀が展開される。昏倒の効果を持つ魔法は水銀に阻まれ、僕に届くことはなかった。

「ほう、まだ足掻くか……よかるう、ならば敬意をもって葬ろう」

時計をちらりと見る。残り時間は1分50秒。

——行けるか。

マクダウエルは血さえすれば魔力を充填することができ、停電後に復活することもできるようになる。つまり、この1分50秒の間意地でもマクダウエルを止めねばならないということだ。

しかし。マクダウエルはどうやら、手加減をしないことに決めたようだ。魔力が渦を巻き、朗々と詠唱が響き渡る。

「魔法の射手・連弾、氷の101矢！」

水銀を展開する。だが、そもそも魔力量からして差があるのだ。おそらく、この一撃は防げない。

氷塊が迫りくる。アレに当たったら痛そうだなあ、とぼんやり思ったその時。

ばさり、と白いものが視界を埋め尽くした。

「神鳴流奥義——百烈桜花斬！」

水銀の盾が破られる感触。だが、衝撃はいつまでも来ない。

閉じていた眼を開けると、そこには警備に行っているはずの桜咲君の姿があった。

「桜咲！ お前——」

「超さんから先生が窮地だと聞いたんです！ 私が時間を稼ぎます、体勢を立て直してください！」

見ると、いまの技で魔法を弾くとともに絡繰君も戦闘不能に追い込んだようだ。人形の方はうまく避けたみたいだが、絡繰君は桜咲君の剣に弾き飛ばされて煙を上げていた。

助かった、と安堵の念が胸を満たす。一息ついてから、僕は水銀を糸状に伸ばして自分の杖を手繰り寄せる。

「貴様——桜咲刹那、なぜここへ来た」

怒り、というよりは面白がっているかのような表情でマクダウェルは問いかけた。

「あいにく、先生にはまだ用事があってな——あなたの知ったことではない」

険しい表情で桜咲君が答えると、マクダウェルはおかしそうに笑

った。

「ククク、貴様も随分と変わったものだな……人前で翼を見せるなど、以前のお前では考えられん」

桜咲君の背には白い翼。猛禽のそれを思わせる翼はしかし、鳥族の間でも強すぎる力を持つとして異端視される白の色だ。

目を凝らせば、ベルンハルトが霊体化したのが見えた。奇襲をかけるつもりだろう、いかに真祖とて霊体化状態の悪魔を感知することとは不可能に近い。

桜咲もそれを把握したようで、剣を構えた。挟撃するつもりか。

人形がマクダウエルの足元へと移動し、大型のナイフを構える。おそらく、マクダウエルは人形に桜咲君の相手をさせるつもりだろうが——それは少し甘い、と僕はほくそ笑んだ。

「これ以上、交わす言葉もあるまい……神鳴流奥義、斬岩剣！」

剣が叩きつけられる。だが、人形はかろうじて桜咲君の剣を受け止め——そして、弾かれた。見れば、ナイフは真つ二つに折られている。

「素晴らしいな、翼を出したことで能力が大幅に上がったか……しかし、いまだ私には——」

マクダウエルが感心した顔で何やら言いかけた瞬間、レイピアが繰り出され背後からマクダウエルの体を貫いた。赤く光るレイピアはたちまち生命力を喰らいつくし、マクダウエルは塵になる。

マクダウエルの背後を取ったベルンハルトは、吸収した生命力を用いて左腕を再生する。真祖はこれで倒しきれないほど甘くないとわかっているので、ベルンハルトは僕と桜咲君のそばに転移すると油断なく剣を構えた。

「困めっ——」

杖を振って僕が命じると、水銀はネギの周りをドーム状になって覆い尽くした。これなら、中のネギが瀕死になるような魔法でもない限り破ることはできない。そしてマクダウエルは無傷のままネギを手に入れたいだろうから、まずは僕を倒すしかないというわけだ。

「ほう、予想していたよりやるな——だが、時間はまだある」

すっ、と手の平を掲げるマクダウエル。再び魔力が集められ、魔法を形成する。

残り時間は30秒。この一撃を持ちこたえれば、いける。

「リク・ラクラ・ラックライラック！ 闇を従え吹雪け、常世の氷雪——闇の吹雪！」

水銀の半分を展開するも、半分の厚さでは数秒も持ちこたえられない。

「多重障壁——！」

ベルンハルトが前に進み出て、手のひらを突き出す。およそ30枚はあるつかという高密度の障壁が展開され、迫りくる黒い吹雪を防いだ。

「クツ——」

だが、真祖の魔法を止めるのはなかなか答えるようだ。ベルンハルトは端正な顔を苦しげにゆがめた。

「桜咲、回り込んで斬れ！」

桜咲君に指示すると、彼女は頷いて飛翔した。三次元的な軌道を描き、マクダウエルは斜め上から剣を構えて斬りかかる。

「神鳴流奥義、雷鳴剣！」

雷をまとった剣がマクダウエルに叩きつけられる。攻撃に集中していたマクダウエルはたやすく吹き飛ばされ、そして橋から放り出された。

しかしながら、そこは真祖の吸血鬼。浮遊術を行使し、湖の上空に浮かび上がった。

残り時間を見る。10秒もない。

「ハハハ、なかなか楽しませてくれるじゃないか。だが——」

先ほどの時以上の魔力が展開される。だが、もはや脅威ではない。街の方で、明かりがついた。

「なんだと！ くそっ、いい加減な仕事を——」

悪態をつき、マクダウエルは橋に向かって飛ぶ。だが、間に合わ

ない。

橋の明かりがつくと同時に、マクダウエルの体を電撃が直撃したように見えた。

マクダウエルが甲高い悲鳴を上げ、封印は復活した。マクダウエルは湖に向かって落下する。

「マスター！」

倒れていた絡繰君がジェットののようなものを噴射し、マクダウエルを助けに行く。まあ、600年も生きてる吸血鬼なのだ。水泳くらいはお手の物だろう。

とても気分がいい。なにせ、桜咲君の助けがあつたとはいえ無事にマクダウエルを退けることができたのだ。この後は二度と生徒・教員に危害を加えないという誓約書に署名してもらい、ギアスを使用する。これで二度と生徒たちが襲われることはないはずだ。

満足げにため息をついてから、僕はこちらへ飛んでくる桜咲君へと問いかけた。

「本当に警備はよかったのか？」

ばさりと翼をはためかせて桜咲君は着地した。彼女もまた、満足げな顔だ。

「実をいうと勝手に抜け出てきたんであとでお叱りを受けなければいけないのですが、まあ警備網は三重になってますから。よほど強力な敵が来ない限り、大丈夫です」

彼女は、微笑みながらそう言った。以前までとは違う、どこか安らいだものを感じさせる笑みだ。

「そついえば先生、ようやく答えを出すことができました。聞いてもらえますか？」

僕は頷いた。桜咲君の顔は真剣だ。ベルンハルトに今日はもう帰っていいという旨のジェスチャーをすると、彼はすぐに透明になって消えた。やはり、消耗は大きいのだろう。

「お嬢様と出会う前、私は剣に慰めを見出していました……お嬢様のそばを離れることを決意した今、私は剣に生きることこそが最も魅力的なように思えるのです」

この剣は西の長に返さなくてはならないんですが、と付け加える桜咲君。

「そばを離れる？ この学校は辞めるのか？」

「いえ、そうではなく。お嬢様には家の事情だと言って、金輪際関わるつもりはないと言うつもりです。ろくに護衛もできなかった私などがお嬢様と親しくするなど、筋違いというものですから」

そつか、と相槌を打つ。それが彼女の決断なら、僕は全力を持って応援するしかないだろう。

「神鳴流も辞めます。もともと妖物を打ち倒す剣ですし、私が目指すのはもつと——なんというか、目的をもって剣を振るうのではなく、剣を高めたいのです。敵を打ち倒すことにこだわりすぎる神鳴

流は、いまの私にはふさわしくないでしょう」

傍から聞けば、それは悲壮な決意に聞こえたかもしれない。だが桜咲君の顔に悲しみはなく、彼女はこれまでになく晴れやかな顔をしていた。

「とりあえず麻帆良で高校を出た後、世界を回る旅に出たいと思います」

「それなら英語を話せるようにならないとな。翻訳の魔法はコストが高いぞ」

「ええ、わかってますよ」

その瞳にはこれまでのような張りつめた色はなく、空を飛ぶ鳥のような気品と自由に満ちていた。

「刀の一本くらいは買ってあげるよ、助けてくれたお礼だ……僕は君を応援しよう、力になれることがあったら何でも言ってくれ」

僕に相談に訪れた生徒が悩みを解決する。こういう体験は初めてだった。マクダウエルを退けたこととあいまって、僕の内からは嬉しさがこみあげてくる。

「ありがとうございます……ではひとつ、お願いが。私の担当になっただけですか？」

魔法先生は通常、2・3人の生徒を自分の担当として受け持つ。僕はまだ着任したばかりなのでそういうことはなかったが、まさか生徒の方からお願いされるとは。意図はよくわからないが、大方ベ

ルンハルトの剣術を盗む気だろう。

「わかった、学園長に掛け合ってみよう。それじゃあ、ちょうどいいし学園長に電話をかけることにする」

このスーツはボロボロでもう着ることはできないだろう。高かったのに、などと惜しみつつポケットから携帯電話を取り出し、学園長室の番号を押した。

「もしもし、学園長じゃが」

電話がつながると、緊迫した声で学園長が問いかけてきた。

「デレクです。マクダウエルは無事に退けました、彼女自身もそうたいした傷は負っていないはずです」

「おお、よくやってくれたのう。詳しい話はこの後、学園長室で聞かせておくれ。ところで桜咲君がそっちに向かったと聞いたが、本人にかわってくれるかのう？」

「いまわかります……桜咲、学園長からだ」

携帯を桜咲に渡すと、彼女は緊張した表情で電話を手を取った。

「はい、桜咲です……はい……ええ、申し訳ありません……はい……わかりました、伺います」

電話をしながら頭を下げる桜咲を横目に、僕はネギを起こしにかかった。杖を振って水をつくりだし、ネギの頭にかける。

「起きろ、終わったぞ」

声をかけると、ネギは跳び起きた。

「デレク！ エヴァンジェリンさんは！？」

「マクダウエルならちゃんと封印された。湖に落ちたみたいだが、絡繰が助けに行ったから大丈夫だろう」

「そうか、よかった……」

ほっと息をつき、ネギは安堵の表情を浮かべた。

さて。桜咲君も僕も学園長室へ向かわなければいけない。

「悪いけどネギ、僕は少し用事があるから先に帰っていてくれ……
あと、荷物もまとめておくように」

「わかったよ、デレク」

絡繰君が湖からマクダウエルを引き揚げたのを見て、僕は桜咲君とともに学園長室へと向かったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7902z/>

転生者は召喚術士

2012年1月4日10時01分発行